

金沢市
二 ツ 屋 町 遺 跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

1998

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は石川県金沢市二ッ尾町に所在する二ッ尾町遺跡の第1次・第2次・第3次発掘調査報告書である。
- 2 二ッ尾町遺跡発掘調査は金沢西部地区土地区画整理事業に伴うもので、各調査の調査期間と調査面積は以下の通りである。

第1次調査	平成元年6月26日～同年7月28日	約1,300m ²
第2次調査	平成7年11月8日～同年12月26日	約2,500m ²
第3次調査	平成8年4月9日～同年6月13日	約2,300m ²
- 3 本報告書の発掘調査はいざれも石川県土木部都市計画課（第1次調査は金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）、第2・3次調査は金沢西部開発事務所）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。第1次調査は、柄木英道（主事）、中屋克彦（同）が、第2次・3次調査は調査第一課長中島俊一の指導の下に、第2次調査は、伊藤雅文（調査第一課主任主事）、松山和彦（同主事）、西井康雄（同技師・土木部技術管理課併任）、松浦郁乃（同講師）が、第3次調査は、伊藤雅文、熊谷葉月（同嘱託）が担当した。
なお、第1次調査では大藤雅男、北野裕保、第2次調査では福田弘光、第3次調査では海野美香子の諸氏の補助を得た。
- 4 発掘調査と報告書の刊行にあたり、石川県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、(社)石川県埋蔵文化財保存協会、(株)太陽測地社の協力を得た。
- 5 本遺跡出土遺物の整理作業は、第1次調査については洗浄・記名・分類・接合を平成元年に直営で行った。第2次調査については洗浄を平成7年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会へ委託し、記名・分類・接合は平成8年度に直営で行った。第3次調査は洗浄・記名・分類・接合を平成8年度に直営で行った。復元・実測・トレイスは3次調査分全てを平成9年度に、(社)石川県埋蔵文化財保存協会へ委託して実施した。
- 6 本報告書の執筆・編集は各調査担当者と協議の上、松浦郁乃・熊谷葉月が行った。執筆分担は文末に記した。
- 7 本調査の出土遺物、記録資料は一括して石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	5
第3章 遺 構	11
第4章 遺 物	
第1節 弥生時代	20
第2節 古代以降	21
第3節 石器・木製品	22

追 梯

報告書抄録

写 真 図 版

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

金沢市二ツ屋町遺跡は、石川県金沢市北部の沖積平野北縁部に立地する。金沢の市街地中心部から北西約4km、日本海に開く金沢港の方向へ離れ、金沢港からみると南南東へ約2km内陸に入る。市内を貫流し、日本海に流れ込む犀川と浅野川ともそのちょうど中間地点に位置し、周辺はその支流や用水が縱横にめぐる低湿地帯である。

近代以前は、海岸と遺跡の間には砂丘後背地としての小丘陵や微高地が存在し、現在よりかなり起伏のある状態であったものと推定されている。

二ツ屋町は南北に長い町域を持ち、国道8号線・北陸自動車道で南北に二分されており、遺跡の範囲はその北部半部にある。



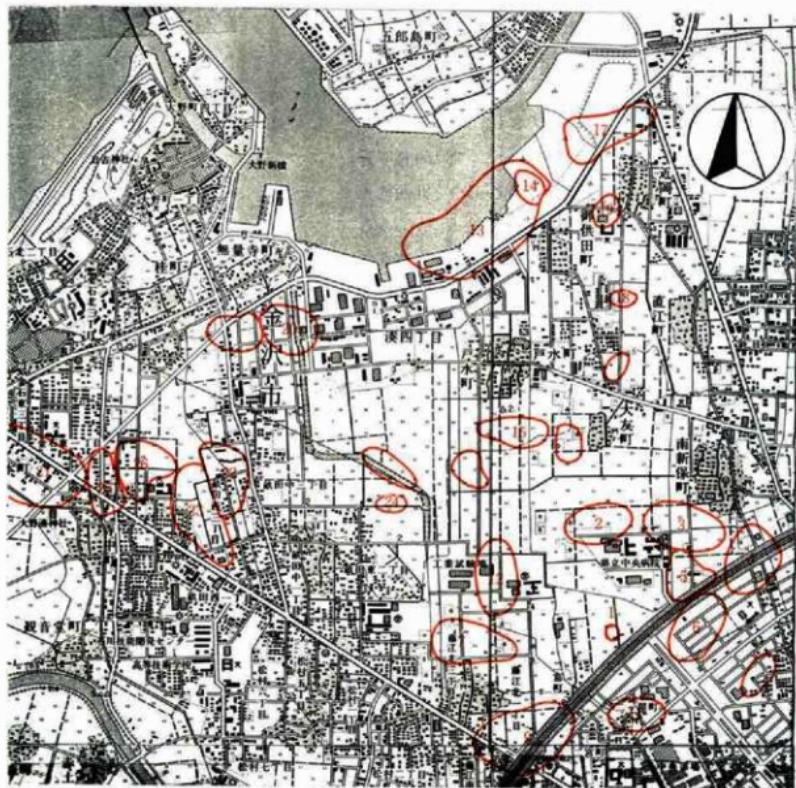
第2節 歴史的環境

周辺は、県内でも有数の遺跡密集地帯である。戸水、藤江、西念・南新保、南新保といった大規模な遺跡群が存在し、本遺跡はそれらに囲まれるように立地する。周辺遺跡の調査は、昭和40年代の北陸自動車道建設、国道8号線整備とともに始められ、昭和50年代の金沢駅西地区の再開発や近年では県や金沢市による区画整理事業、開発事業とともに、件数、規模とも急増した。また本遺跡の約0.5km北西に位置し、平成13年に予定されている県庁移転地も戸水B遺跡の範囲内である。周辺整備も含めて、これから多くの調査が予想される。近年来の調査成果にはめざましいものがあり、開発の代償としてではあるが、周辺地域の歴史像が新しい事実を加えながら、明確にされつつある。

この地域で最も古いとされる遺跡は縄文時代晚期の近岡遺跡である。包含層からの土器の大量出土であり、明確な遺構は検出されていない。

弥生時代になると、遺跡数もその広がりも増加、拡大する。本遺跡も弥生時代中期の条痕文系土器が河道路から一定量出土したことから特徴的存在となっている。中期末の標識遺跡とされる戸水B遺跡、小銅鐸や銅劍の出土した藤江B遺跡、畠田遺跡、寺中遺跡など弥生時代後期に入るとその傾向はさらに強くなる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落以外にも方形周溝墓や土坑墓、古墳が築造される。現在は見られなくなってしまった微高地地形上に古墳や墳丘墓が築かれていたとされる。それらは古代以降の開発、特に大正時代から始まる大規模な耕地整理事業などによって削平されたものと考えられている。戸水C古墳群、藤江C古墳群、西念・南新保遺跡など、発掘調査によって周溝が検出され、その存在が確認された例が少なくない。最も近くでは、南新保C遺跡でも弥生時代後期の方形周溝墓



第2図 遺跡の位置

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	二ツ橋町遺跡	集落	弥生・奈良・平安	14	戸木C古墳群	古墳	古墳
2	南新保E遺跡	集落	古墳～中世	15	戸木遺跡群	集落	弥生～古墳
3	南新保C遺跡	集落	弥生・古墳	17	近岡遺跡	集落	縄文・弥生
4	南新保D遺跡	集落・古墳	弥生・古墳	18	近岡カシタニギ遺跡	集落	弥生～古代
5	南新保三枚田遺跡	集落・古墳	弥生・古墳	19	近岡ナカシマ遺跡	集落	弥生・古代
6	西込・南新保遺跡	集落・古墳	弥生～古代	20	無量寺遺跡	集落	中世
7	蘇江C遺跡	集落	縄文～中世	21	金石本町遺跡	官衙	古代
8	蘇江C古墳群	古墳	古墳	22	鶴田遺跡	集落	縄文～中世
9	蘇江B遺跡	集落	弥生～古代	23	鶴田・寺中遺跡	集落	古墳～中世
11	二口六丁B遺跡	集落	弥生	24	鶴田ナベタ遺跡	集落	古代
12	戸木B遺跡	集落	弥生	25	寺中遺跡	集落	弥生
13	戸木C遺跡	官衙	古代				

・土坑墓群、古墳時代前期の前方後方墳、方墳を中心とした古墳群が確認されている。この時期の遺跡の中でも西念・南新保遺跡は、地域の拠点集落的性格を指摘されている。

古墳時代中期から奈良時代前半までは、遺構・遺物の検出例が少なく、空白期とされる。周辺の地域が古代において明確にその存在が捉えられるようになるのは、8世紀後半から9世紀はじめにかけてである。この頃にも遺跡数は再び急増する。この地域を含む加賀北部では初期荘園開発が盛んになる時期にあたり、藤江B遺跡では「石田庄」、戸水大西遺跡では「伯庄」の墨書き土器が出土している。これらの名は、文献にみられないが、両遺跡とも大型掘立柱建物跡群が検出されており、荘園の管理施設として認識されている。また、金沢港沿岸の戸水C遺跡では、大型建物跡群が官衙的配列で検出されており、「津」墨書き土器が示すように、古代の港湾官衙施設と推定されている。

金沢港沿岸に立地する普正寺遺跡ではまとまった量の貿易陶磁器片などが出土しており、中世貿易の拠点としての大野湊の存在と、その中心施設の存在を示すものとされる。

周辺地域は、中世には大野郷に属している。13世紀後半、南新保E遺跡では掘立柱建物が溝で区画された土地に建てられており、中世農村の散村的な景観が想定される数少ない調査例である。

近世遺跡の数は中世よりもさらに減少する。距離的に最も近いものでは、畠田遺跡などがある。調査例が少なく、遺跡として認識されたのが、最近であるためであり、これから調査で増加する可能性がある。

(熊谷)

参考文献

- 『西念・南新保遺跡IV』金沢市文化財紀要119 金沢市教育委員会 1996年
- 『戸水B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1994年
- 『戸水C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1996年
- 『畠田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1991年
- 『戸水遺跡群』金沢市文化財紀要133 金沢市教育委員会 1997年
- 『金沢市藤江C遺跡II』石川県立埋蔵文化財センター 1997年

第2章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

二ッ屋町遺跡の発掘調査は金沢西部地区土地区画整理事業にかかるものである。平成元年5月1日付け金高架発第55号にて金沢駅鉄道高架事務所・金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）より依頼を受け、同年5月9日～10日にかけ金沢市二ッ屋町地内において約3,500m²の試掘調査を実施した。その結果、新たに遺跡が発見され、同事業の戸水B遺跡第4次調査と並行して、約1,300m²について発掘調査を行うことになった。

第2次調査は平成7年4月3日付け金西部第31-2号にて、第3次調査は平成8年3月13日付け金西部第644-3号にて石川県土木部都市計画課・金沢西部開発事務所より依頼を受け、それぞれ約2,500m²と約2,300m²の発掘調査を行った。第2次調査については、同年には同事業にかかる藤江B遺跡・南新保E遺跡の調査が先行して行われていた。当初藤江B遺跡の担当者が調査終了後に入る予定であったが予定通り進まず、南新保E遺跡の調査が順調に進んでいることから、まずそちらの担当者が調査に入るとなつた。調査面積は金沢西部開発事務所より要望のあった優先箇所の約700m²を終了させることになった。実際現地にはいると、遺跡の縁辺部と思われていた地点に遺構が集中しており、更に遺跡の範囲が広がる可能性がでてきた。11月下旬には藤江B遺跡の調査も終了し、2班合同での調査となつたため、調査区を拡張し最終的には約2,500m²を調査した。同時に遺跡の範囲も確認し、次年度の調査範囲のおおよその確認も行った。

第3次調査は例年の調査開始より早く平成8年度4月早々から着手された。事業工事期限のほか、同年度中に南新保E遺跡・南新保C遺跡の調査も同じ班で行う予定であったので、日程的に余裕がなかったためでもある。掘立柱建物跡の存在が確認された十字状のトレンチ（B区）を面的に広げる（F区）など、第2次調査で確認された状況をもとに調査区を設定した。検出遺構などの状況もほぼ予想された内容であった。6月初旬より航空測量日程調整も含め、南新保E遺跡第2次調査を並行して行い、ほぼ当初の予定通り、6月下旬に調査を終了した。

なお、金沢西部地区土地区画整理事業に係る二ッ屋町遺跡の発掘調査は第3次調査をもって全て終了した。

（松浦）



第3回 調査区の位置

第2節 調査の経過

第1次調査

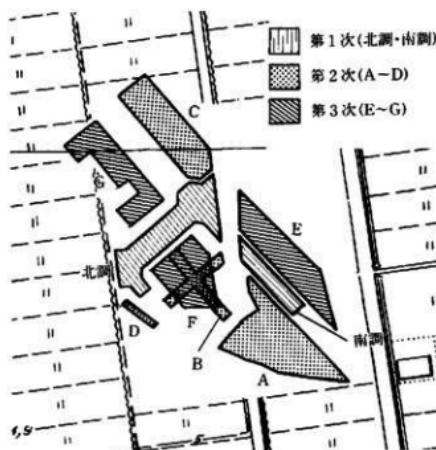
- 6月22日 機材搬入
6月26日～28日 重機による表土除去作業 遺構検出作業
7月10日～ 北調査区検出、掘削開始
7月14日～ 南調査区検出、掘削開始 調査区杭打ち
7月20日～24日 平板測量
7月25・26日 重機による埋め戻し
7月28日 機材撤収

第2次調査

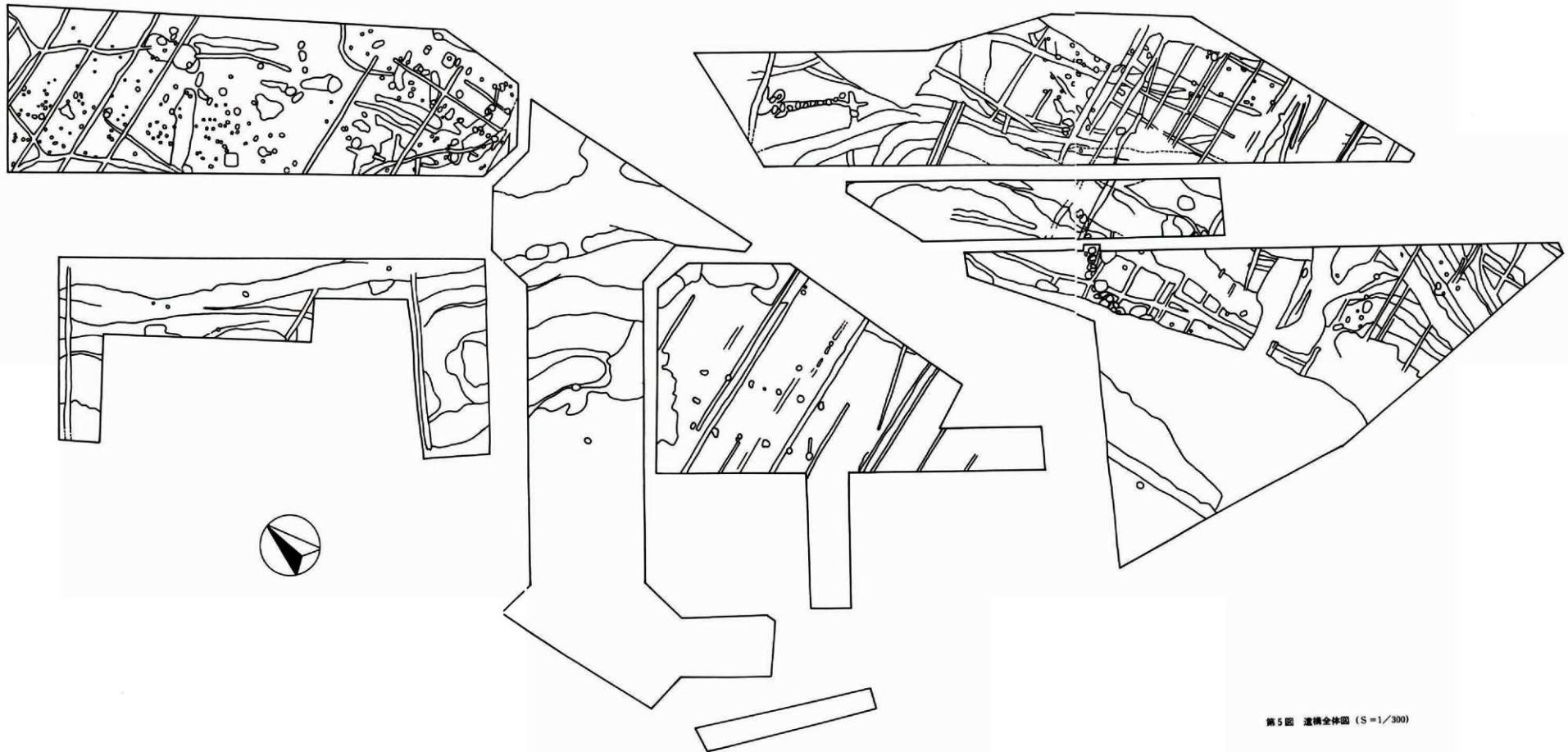
- 11月8日～10日 重機による表土除去作業
11月13日～ A区検出、掘削開始（28日より藤江班と合流）
11月29日 C区重機により拡張
12月4日～ C区検出、掘削開始
12月12日 B・D区検出、掘削
12月19日・20日 クレーンとラジコンヘリコプターによる航空写真測量
12月26日 機材撤収

第3次調査

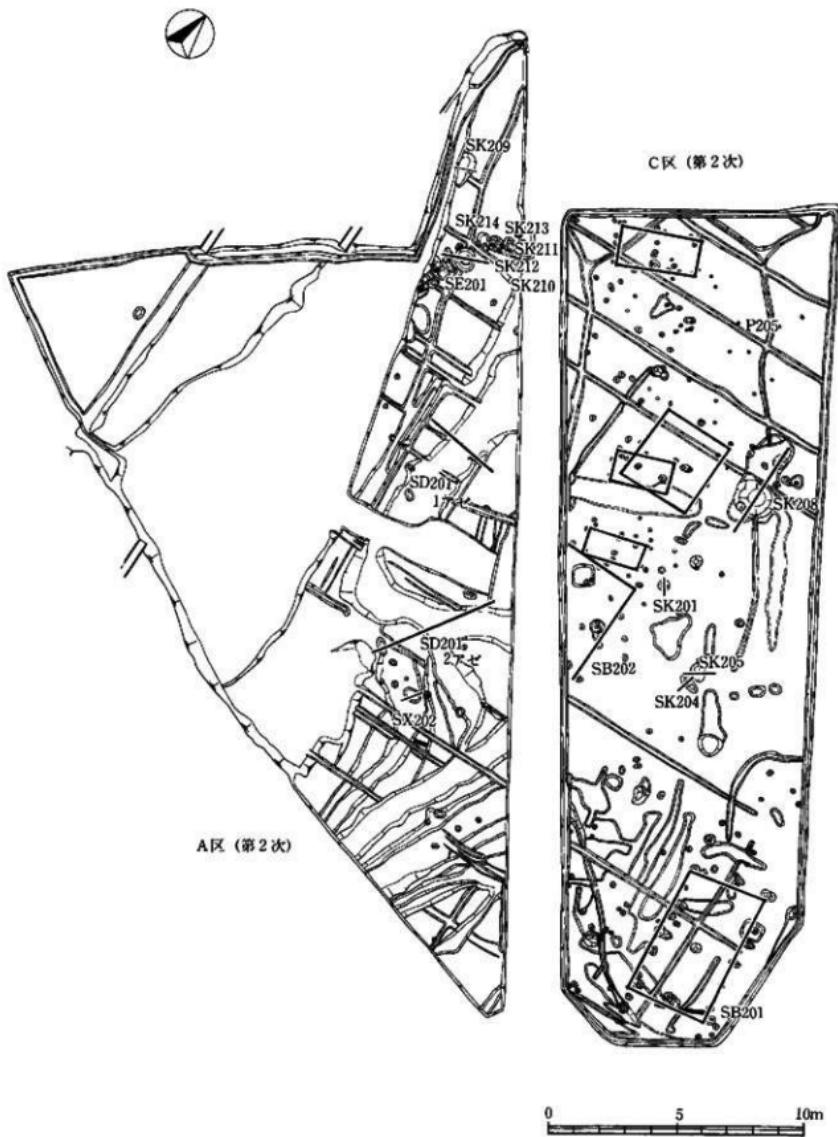
- 4月15日～17日 重機による表土除去作業
4月24日～ 作業員をいれての作業開始
4月25日～ 調査区設定 E・G区検出、掘削開始
5月8日 G区全体写真撮影
5月15日 E区溝掘削開始
5月27日 F区全体写真撮影
(6月5日～11日 南新保E遺跡の準備のため作業中断、6月3日より南新保E遺跡の調査と並行)
6月17日～18日 航空測量のための清掃
6月19日 ヘリコプターによる航空写真測量、排土処理
6月24日 機材撤収



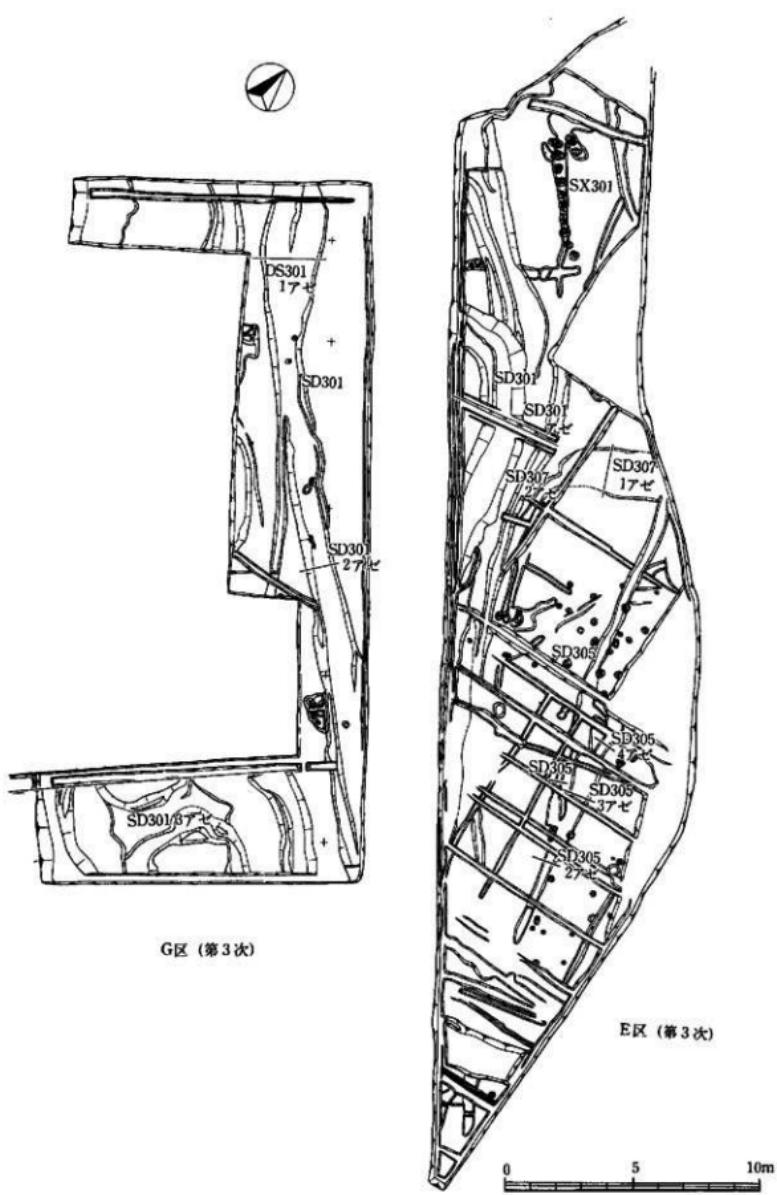
第4図 調査区の配置図



第5図 造構全体図 ($S=1/300$)



第6図 A区・C区遺構図 (S=1/200)



第7図 E区・G区造構図 ($S=1/200$)

第3章 遺構

河道 (SD101・SD201・SD301)

1次調査から3次調査まで、いずれの調査区からも検出された河道である。自然河道と思われ、途中他の溝と合流・分岐をしながら南北方向に大きく蛇行した流路をとる。幅はもっとも広いところで約5m、深さは0.7m前後となる。上層からは古代の遺物の出土が多く、須恵器杯類、土師器碗類が目立つ。また「天」「河」と書かれた墨書き土器も出土した。時期は8世紀後半から9世紀前半までに集中する。9世紀後半から10世紀に下るものもごく少量見られる。また、漆塗皿、上面出土の青磁片など中世の遺物も若干出土した。下層からは、古代と弥生時代の遺物が混在して出土した。上層をはずした段階で下層はかなり様子が変わり、1~2m幅の小さな数条の流路へと姿を変える。ここで見えてきた地山部分より弥生時代中期に該当すると見られる遺構(SX202)が検出された。弥生時代中期の遺物が大量に出土した最下層は、サブトレンチを入れたところ数カ所から集中して出土したものであり、古代の遺物がいずれの調査区の河道からも普遍的に出土するのに対し、偏りを見せるようである。

S B 201

3間×2間。長軸方向はN13°Eである。桁行きは両端の1間が約2.2mで2間目は3.2mと大きくなる。対応する桁においてもほぼ同様である。梁行きは1間が約2.3mとなる。一部柱穴を共有しており、数回の建て替えが行われていたとみられる。

S B 202

確認された規模は、桁行3間(2.2m)・梁行2間(2.3m)をはかる。長軸方向はN7°Eである。反対側の梁行・桁行ともに調査区外に延びており、建物規模はさらに大きくなる可能性が考えられる。

S B 203

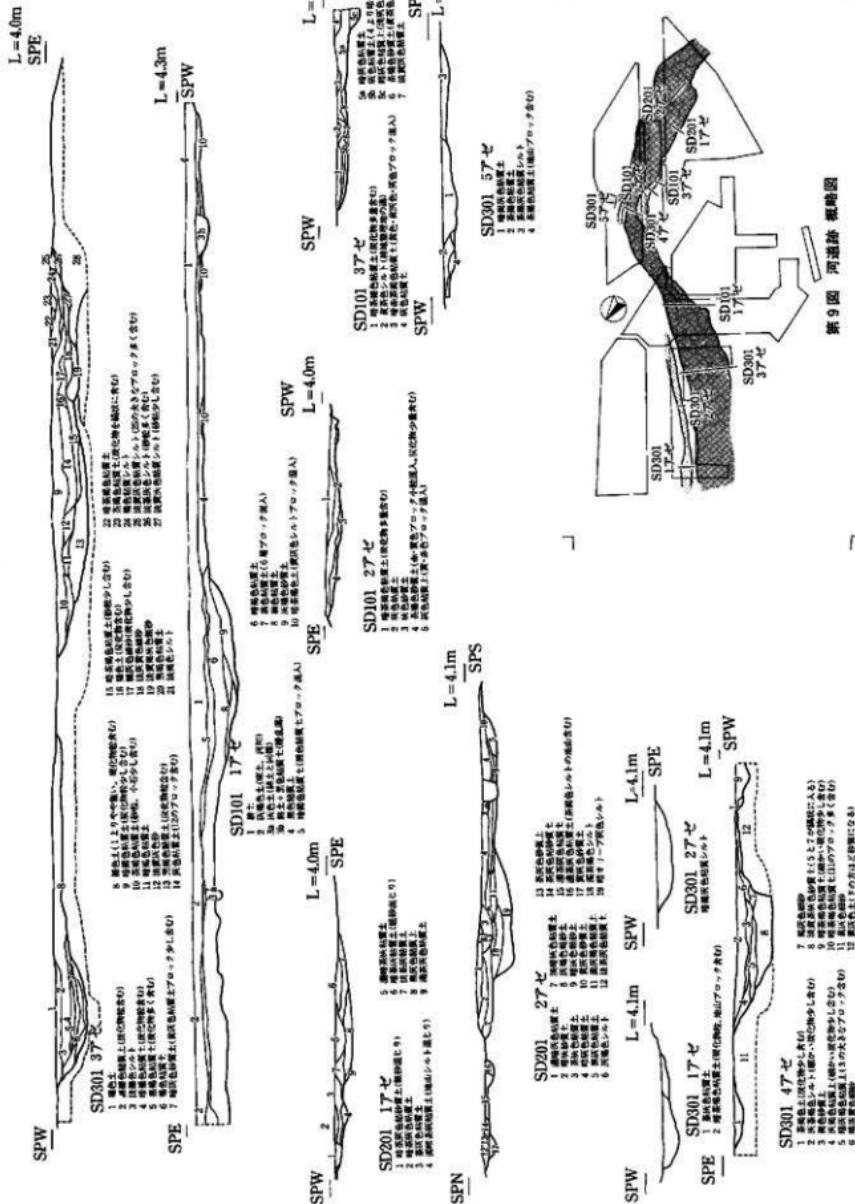
桁行・梁行とも2間の建物跡。隅丸方形の柱穴を持つ。主軸方向はS5°Eとなる。他にも多数のピットが周辺にはみられるため、建物がさらに存在していたと見られる。それらはほとんどが1間ないし2間の小規模な建物で(第6図)、長軸方向も前述の建物とは異なる。(松浦)

S B 301

E区西北寄りで検出された、梁行2間(5.2m)・桁行5間(17.8m)の掘立柱建物跡である。軸方向はN15°Eである。南列の真中の柱穴は検出されなかった。

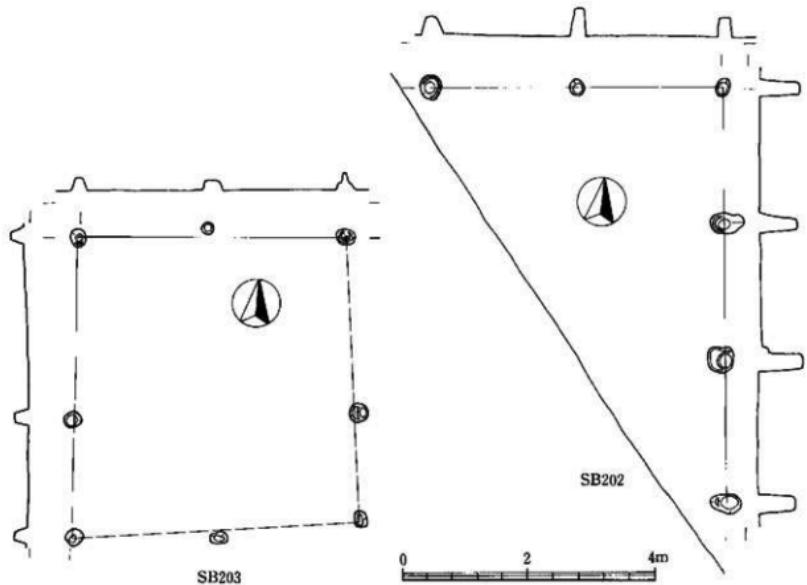
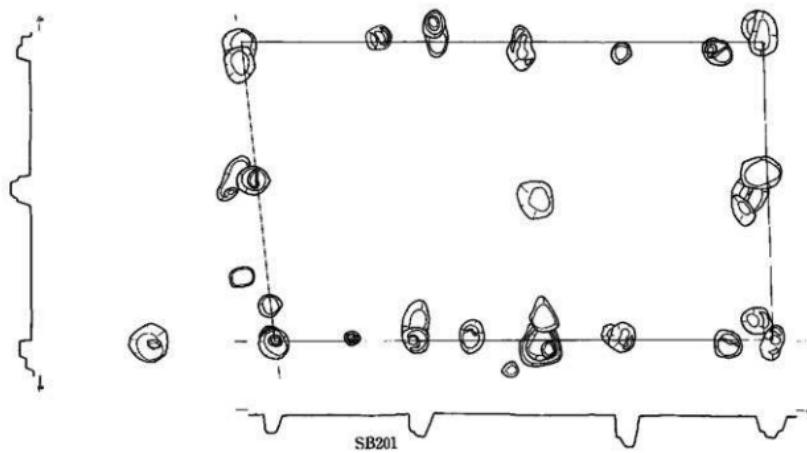
P312から内面黒色土師器片が出土している。底部ヘラ切りで、体部下外側面を回転ヘラ削りするものと思われ、8世紀末~9世紀前半の年代が考えられる。柱穴の掘方は円形で、検出面で掘方と柱材の抜き取り痕跡とで切り合いがみられ、柱材を倒しながら抜き取っている。建て直しを含め、重複する柱穴、建物跡はない。

S B 301東列から約3m東に位置するP314からは約15cm程度の石と瓶類の一部と思われる須恵器片が出土している(第12図)。図化できなかったが、胴部2片、頸部1片、底部1片の同一個体と思われる。これらの覆土の上面は厚さ約1cmの炭化物層が覆っていた。(熊谷)

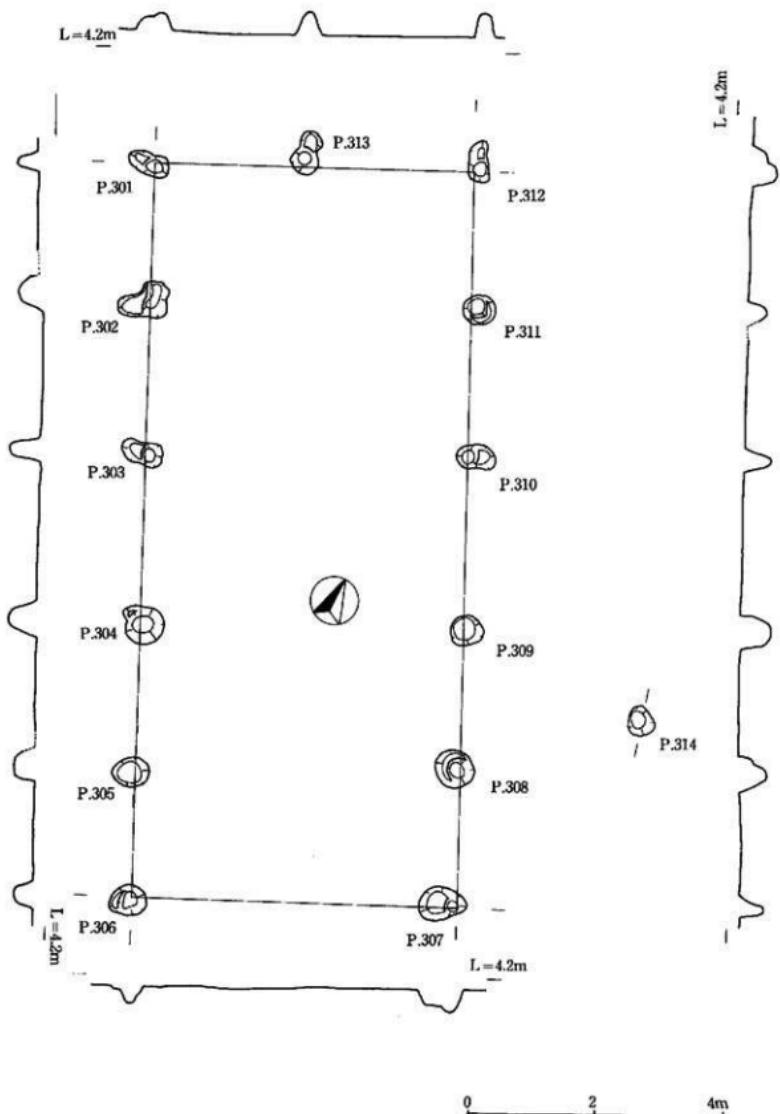


第8図 河道跡 土層断面図 (S-1/80)

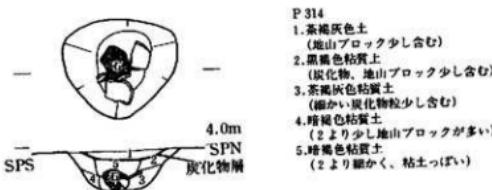
第9図 河道跡 総略図



第10図 C区 SB201. 202. 203. (S=1/80)



第11図 F区 SB301 ($S = 1/80$)



第12図 P 314 平面図・断面図 ($S=1/30$)

S K 201

直径52cm・深さ50cmの平面が円形で、壁が真っ直ぐに立ち上がる土坑。覆土は炭混じり灰色粘土である。

S K 204

直径25cm、深さ50cmの断面はすり鉢状を呈する。

S K 205

平面椭円形の土坑。壁面は南側はなだらかに、北側はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。覆土は灰色粘質土を基本とする。覆土から弥生時代中期と予想されるが、遺物等の出土はなく、断定は出来ない。

S K 209

近代以降の河道に切られているために全形の把握はできない長軸で約200cm・深さ20cmの断面が緩いU字状を呈する土坑。9世紀終わり頃の内面黒色土器の皿が出土している。

S K 210

直径約1.4m・深さ約0.4m、断面は緩いU字状を呈する土坑。

S K 211~214

S E 01と共に溝状に連なる土坑群。いずれも覆土は濃暗茶褐色粘質土の単層である。性格は不明。調査中は、平地式建物跡の周溝は土坑が連続し、溝状を呈するものがあるため、周溝の可能性が考えられていた。しかし、東西方向に緩く蛇行して連なっており周溝の様に環状にはならない。出土遺物はS K 10よりくるみの殻、焼成の悪い須恵器、S K 11より土師器の椀が出土しており、9世紀後半代に比定される。

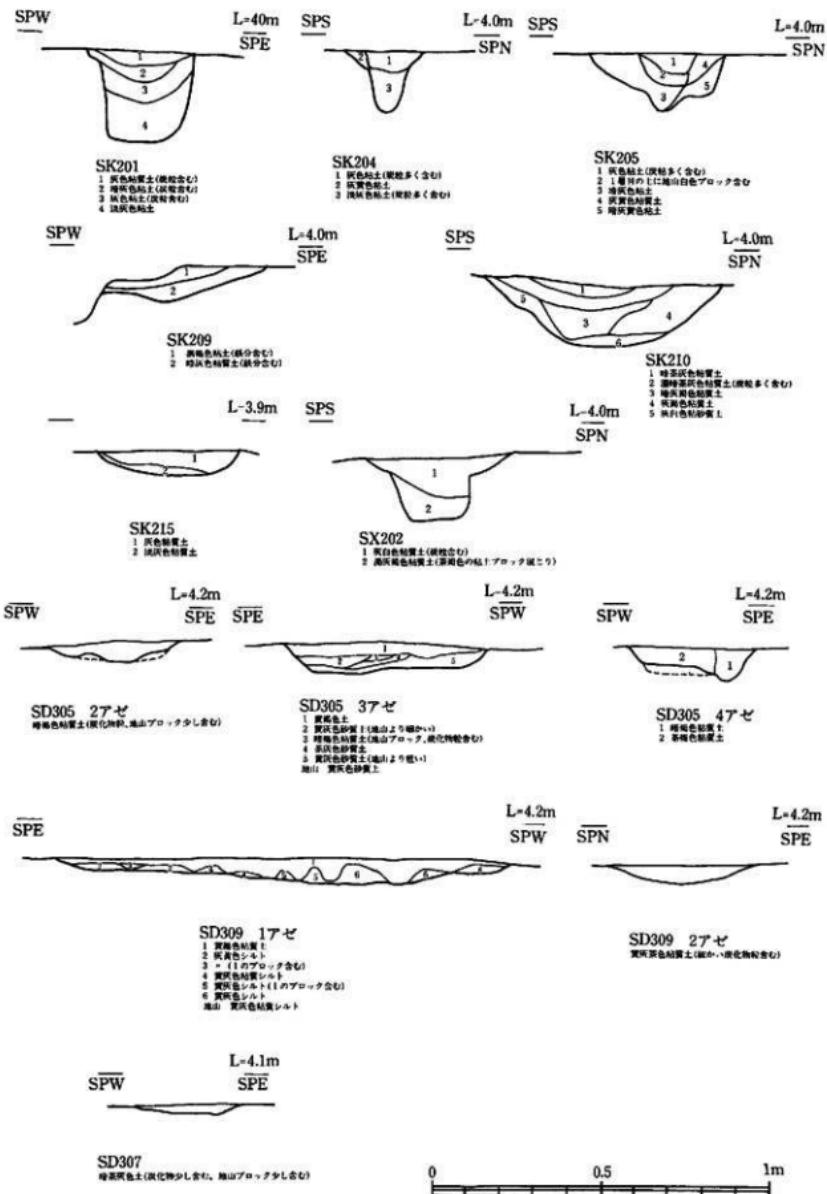
S X 202

平面形が歪んだ椭円形で直径0.9m・深さ0.35mを計る。S D 201の上層を外したところで検出された。遺構は砂質土中に掘込まれており、わき水も多く非常に崩れやすい。弥生時代中期の条痕文系土器と一緒に炭化した木片とクルミの殻が出土した。

(松浦)

S D 305

E区中央東より検出された。2カ所で分岐し、さらに合流して北上する。自然河道跡と平行した流路をとることから、小河川あるいは、ある時期の流路の一部の可能性がある。



第13図 SK・SD 土層図 (S = 1/30)

S D 306

E区北半、中央北東寄りで検出された小溝である。溝の掘方が逆台形なので人為的なものであると思われる。

S D 307

E区北半、北東よりで S D 306と切り合う。遺物の出土はなく、河道路との関係も不明である。

(熊谷)

S E 201

掘方を含めた直径が約1.85m、検出面からの深さ約1.54mを計る。掘方は円形を呈し、断面は筒状である。井戸枠が残っており、枠の内径約0.85m、1個体であった割り抜きの木材を切断し、使用したものと考えられる。井戸枠の下は約5mm大の小砂利がU字状に入る。小砂利層は井戸枠の下部のみにしか見られず、井戸の掘方を掘削した段階で小砂利を敷きつめ、その上に井戸枠の下端を乗せていくようである。地山部分は軟質な土のため、井戸枠が沈下するのを防ぎ、同時に浄水の機能も持っていたと考えられる。井戸の底部に小礫を敷く例は羽咋市深江遺跡で、また礫を敷く例は徳前C遺跡、寺家遺跡砂田地区、戸水C遺跡など、多くの井戸で見られる。

S K 208

径約2.6m、検出面からの深さ約1.8mの不整円形、断面形は擂り鉢型を呈する。調査中かなりの湧き水が見られた。付近に建物跡などがあることから井戸としての使用が考えられる。調査時点で井戸枠は残っていないかったが、覆土の堆積状況から上部の井戸枠は抜き取られ、下部の井戸枠は残されていた可能性が考えられる。粘性の強い覆土でレンズ状に堆積している植物遺体層を2層かむ。須恵器片と内面黒色土器の破片が出土しており、その上限から9世紀後半には埋没していたと思われる。

(松浦)

S X 301

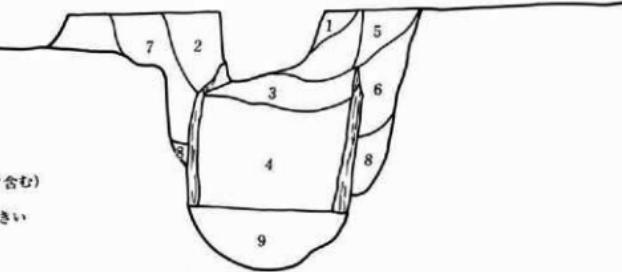
河道（S D 301）の東側、E区北寄りで検出された。ほぼ等間隔で複数のピットが並び、幅50cm、深さ20cmの浅い溝でつながっている。それらのうち4つには、それぞれ2つずつの柱痕跡がある。溝は河道にほぼ平行にのびており、柱痕はその垂直方向に並ぶ。そのほかのピットには柱痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器小片が数点のみで、年代は特定できない。2本並べた柱の間に板などを固定して屏としたものの可能性なども考えられるが断定できない。この遺構から東側は擾乱、あるいは調査区外になり、遺構が検出されていないため、性格も不明である。

(熊谷)

SPW

L=4.1m
SPE

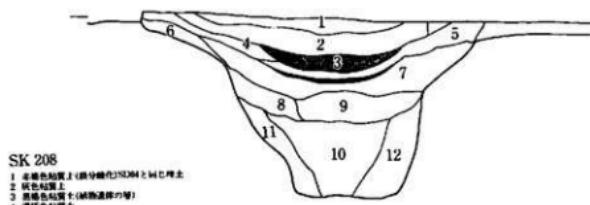
- SE201
1.灰色粘質土
2.黒灰色粘質土
3.2層目が発化
4.黒灰色粘土
5.暗灰色粘土
6.暗灰色粘土
(白色地山ブロック含む)
7.6層目と同じ。
地山ブロックが大きい。
8.暗灰色粘土
9.小砂利層



第14図 SE 201 (S=1/40)



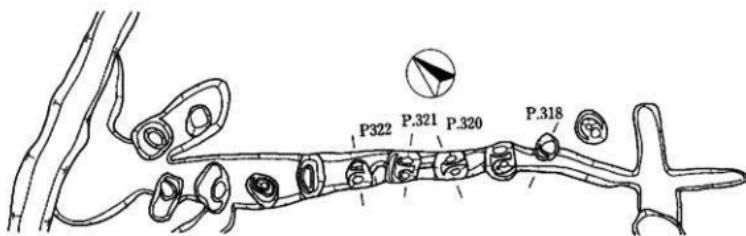
SE 201 たち割り



SK 208

- 1 基礎地盤層 (基盤地化) 層と同じ様子
- 2 深成岩層
- 3 深成岩層 (地質過程の)
- 4 滲透性地盤層
- 5 滲透性地盤層
- 6 滲透性地盤層 (地盤白色ブロックを含む)
- 7 滲透性地盤層 (地盤白色ブロックを含む) (地盤白色ブロックを含む上層に構造複雑度あり)
- 8 滲透性地盤層
- 9 滲透性地盤層
- 10 滲透性地盤層
- 11 地盤白色地盤 (地盤白色ブロック含む)
- 12 地盤白色地盤 (地盤白色ブロック含む)

第15図 SK 208 (S = 1/50)



第16図 SX 301 平面図 (S = 1/80)

断面図 (S = 1/40)

第4章 遺 物

第1節 弥生時代

出土した土器は、河道最下層からのものが大半を占める。河道以外の遺構からの出土はごく僅かであり、図示出来るものはほとんどなかった。弥生時代中期の遺物が中心となり、後期の高杯が1点混入する。沈線文系土器、条痕文系土器、櫛描文系土器が見られる。器種は壺・甕がほとんどと思われるが、条痕文土器以外は残存率が悪く、器種を特定し得るものは少ない。

(第17図) 1から7までは沈線文系土器である。1は真っ直ぐ外傾する平口縁で外面に菱形になるような沈線を引き、口縁部として区画するように横位に沈線を施す。内面に指頭圧痕が残る。2は緩く外反する平口縁で外面に山形文を逆さにしたように沈線を何重にも引く。内面はハケ状具による調整が施される。3は口縁内面が肥厚し、口唇部は刺突される。外面はヘラ描きによる沈線を施す。4は外反する平口縁で外面は棒状具による波状文が3条、その下部に縦の沈線が施される。内面はヘラ状具による沈線が10条施される。5は緩く外反する小波状口縁の波頂部分である。内面に1条沈線が入る。6は緩く外反する平口縁。平行沈線を施し、その下部は斜沈線を施す。7は2条の平行沈線を施し、その区画内に細かい繩文を施す。8・9は条痕文系土器である。8は口縁端部を指圧による波状口縁とし、3条の指引き沈線が見られる。内面はナデされる。9は口縁端部を棒状具により斜めに刻む。2条の指引き沈線が見られる。タールが付着しているため表面は光沢をもつ。10は高杯の脚部と思われる。木目状沈線が巡る。11・12は甕の底部である。11はスダレ状圧痕が見られる。13は口縁部が緩く外傾し、口縁端部を棒状具により斜めに刻みを入れた土器である。指引きの沈線による2条の直線文がみられる。胴部に補修孔が穿たれている。

(第18図) 14は頸部がくびれ、口縁が大きく外反する。2条の指引き沈線による直線文及び波状文が施される。直線文には引き継ぎの盛り上がりが見られる。15は緩いくびれ部から大きく外反する小波状口縁。端部は指圧によって刻まれる。胴部は斜め方向に指引きの沈線が3条施される。16は直線的に立ち上がり口唇部を細い棒状具により刻む。内外面ともに条痕調製が行われる。外面は厚く炭化物が付着する。17はまっすぐ立ち上がり、口唇部が若干内湾する。外面は沈線により施文する。内外面ともに朱塗りされ、煤が付着する。器種は不明。18は口縁端部に粘土を張り付け、指圧される。胴部には指引きによる沈線が1条見られる。19は口縁外面を棒状具により刺突したもの。口縁内面は櫛状具による沈線が施される。20は口縁部が頸部から大きく外反する壺。外面は条痕調整の後に沈線により施文される。

(第19図) 21は大きく外反する口縁を持つ長頸壺である。口縁端部は棒状具により細かい刻み目が施されている。外面は口縁部は縦方向に、頸部は斜に条痕調整する。両者を区画するように横方向に沈線が引かれる。内面は指ナデされる。22は壺の肩部と思われ、幅の広い条痕文、肩部には横方向の直線文、棒状具による波状文が施される。23は受け口状口縁壺。口縁部外面は条痕調整をおこない、口縁部上段には練杉文を施し、下段は条痕文、下端部は棒状具による波状文となる。内面は条痕文が5条引かれる。24は甕で外面にはハケ調整、底部付近は削りの痕が見られる。外面には全体的に煤が付着する。25は頸部がくびれ、大きく外反する口縁をもつ甕。内外面ともにハケ状具により調整される。頸部から肩部にかけては煤が付かず、そのほかの部位に厚く煤が付着する。26はくびれた頸部よ

り外反して立ち上がる口縁の甕。口縁端部はなでられる。内外面ともハケ調整される。頸部に紐穴と見られる2個2対の穿孔あり。外面は煤が付着する。

(第20図) 27は口縁が大きく外反し端部を棒状具により刻んだ甕。28口縁部はくびれ部より直線的に外傾する。口縁端部は棒状具により刻み目が入る。29の口縁は緩く外反し、口縁端部は棒状具により刻み目が入る。外面には煤が厚く付着する。30・31はほぼ同様の形態であると思われ、水平に外反する口縁部をもち、口縁内面は綾杉文が施される。31の外面はハケ調整後に櫛状具による施文を行う。32は口縁端部に凹線を引き、肩部に貝殻刺突を施す甕。他のものより新しく弥生時代中期末葉と思われる。33は口縁が広く外反する高环の杯部。口縁部下端に1条の沈線を引く。弥生時代後期と思われる。

(松浦)

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター『下安原海岸遺跡』1997年

金沢市教育委員会『金沢市矢木ジワリ遺跡 矢木ヒガシウラ遺跡』1987年

第2節 古代以降

第1次から第3次まで全体を通して、古代の遺物は、パンケース約6箱程度である。河道以外の遺構に伴う遺物の量は少ないので、ここではまとめて報告する。図化したのは31点である。須恵器(34~51)、土師器(52~59)、土錐(60、61)、中世のものは青磁片(63)、漆器皿(62)である。

須恵器

(第20、21図) 34、35は杯蓋である。34は扁平な紐を持ち、口縁部かえりの断面は丸みをもって平たく折りこまれている。35は口縁部がやや内側に折りこまれ、断面が三角形になるものである。紐部分は欠損している。

36~40は有台杯である。36は、高台着床部分に粘土片が溶着しており、それを削りとった痕跡がみとめられる。38は、外へ開いてまっすぐ立ち上がるが、口縁端部はやや外反する。39は低くて扁平で丸みのある高台を持つ。底部からの立ち上がりも丸みを帯び、体部の器壁は薄いが口縁端部はほんの少し肥厚する。40は体部の回転ナデ調整痕が顕著である。

41~45は無台杯である。41以外は墨書き器である。41はかなり器高が低くなった杯で、体部は外へ開いて立ち上がる。口縁端部が若干玉縁状になる。42は底部ヘラ切りの後、工具で不定方向に面をならしており、細かい傷状の痕跡が残る。43は底部ヘラ切りの後、軽くほぼ一定方向にナデ調整を行っている。

46、47は鉄鉢形須恵器である。46は底部に糸切痕が残る。47は底部が欠損して断定できないが、口縁部がやや内湾することから鉄鉢と判断した。

48は短頸甕である。肩部に1mm幅の沈線2本がめぐる。口縁部は円周の約1/3が残るが、ゆがみがみられる。胴部は回転ナデ調整である。

49は甕口縁部である。甕はほかに数点みられたが、口径が復元できたのはこれのみである。

50は台付瓶、頸部と胴部のみで肩部を欠くが、同一個体と思われる。

51は高环の脚部である。中程に沈線2本を巡らす。

土器器

(第21図) 52は有台椀の底部である。底部内側中央が盛り上がる。53～57は内面黒色処理の土器器で53、54は無台、55、56は有台椀である。53は底部と側面下1/3に回転ヘラケズリを施している。内面のミガキ痕も明瞭である。54は底部回転糸切を施す。55は大型の椀で底部は糸切、高台は貼り付けで高台端部はやや丸い。口縁端部はやや外反する。内面にミガキ痕跡が明瞭に残るほか、外面にも口縁から1/4の位置まで横方向のミガキ痕跡がみられる。56は底部から粘土を引っ張り出して高台を作っている。底部外面に指圧痕が放射状に残る。このような例は越中から北加賀まで分布することが報告されている。図示したもの以外に同様のものが、2点出土している。

57～59は甕である。57は長胴甕である。磨滅が著しいが、わずかに横方向のカキメが残る。58は平底の小甕で底部静止糸切りであるが、59は内外面とも煤の付着が著しく、特に外面の側面下部に炭化物の残存が多い。底部は静止糸切りである。

土 箸

(第22図) 2点出土しており、両者とも完形で、摩滅などの痕跡も顕著にはみられない。60は管状細形の土箸である。両端に平らな面を持つ。61は球形の土箸である。指圧痕が多く残る。

木製品

(第22図) 63は黒色漆器皿で厚さは約1mmと非常に薄い。河道跡上層からの出土である。

青 磁

(第22図) 62は青磁碗の破片で蓮弁の浮彫が施される。青磁の小片は他に2点出土しており、いずれも14～15世紀のものと考えられる。

墨書土器

(第20図) 42～45の墨書土器は「河」が2点、「天」が2点出土している。墨書の位置は、すべて無台杯底部外面である。図化したもの以外にも同じ様に無台杯の外底部に墨書された須恵器片が2点出土している。文字は欠けており、解読できない。800m西に位置する西念・南新保遺跡でも「河」「河戸」「天□」の墨書土器が報告されており、共通するものとして興味深い。

(熊谷)

参考文献

北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器模相』 1997年

北陸古代土器研究会『北陸古代土器研究』第7号 1997年

金沢市教育委員会『西念・南新保遺跡IV』 1996年

第3節 石器・木製品

石製品

(第22図) 1～5はいずれも打製石斧である。バチ形と短冊形を呈するものとに分けられる。片面に自然面を残し、刃部よりむしろ側面の調整を丁寧に行っている。6は打製石鎌である。河道最下層より出土した。基部形態は平基、体部形態は三角形を呈する。全長4.2cm・幅1.4cm・重量2.4gを計る大型品である。

木製品

(第23、24図) 1～4はS E 201で使用されていた井戸枠である。1と2は下端部同士が接合し同一部材から作られていた。1は全長73.2cm・幅63.1cm・厚み6.8cmを計る。胴部に縦4cm・横1.2cmの長方形の穴が1つ開けられており、中は木材が詰まっている。2は長さ74.5cm・幅63.7cm・厚み7.2cmを計る。一部火熱を受け焦げている(スクリーントーン部分)。1と2は下端部断面に切断時の鑿等の加工痕が明瞭に残る。3は長さ66cm・幅45.2cm・厚み6.8cm。4は長さ71.9cm・幅25.6cm・厚み5.0cm。この2つはいずれとも接合はしなかった。使用木材は針葉樹とみられる。

井戸枠の1と2を接合すると全長約150cmにもなる。この材は単なる丸太削り抜きではなく、1の長方形の穿孔は、準構造船の船底部と舷側板を接合するために開けられた柄穴の可能性も考えられる。滋賀県守山市下長遺跡出土の準構造船の場合柄穴が約30cm、大阪府八尾市久宝寺遺跡出土の準構造船の柄穴は40～50cm間隔で開けられたものが複数個みられる。当遺跡のものは1つしか確認出来ておらず、舟材かどうか確認は出来ない。ただ井戸のそばを流れる自然河道は水路としての使用が考えられるため運搬等に使用した船を井戸枠として再利用した可能性はあり得る。船材を井戸に転用した例としては県内では小松市松梨遺跡があげられる。船の船先と艤が利用される。船の胴体部分を使用した例としては大阪府八尾市萱振遺跡があげられ、古墳時代に廃棄されたものを奈良時代に井戸側として再利用したとされる。

5はC区のP 205より検出された。柱根かと思われたが対応する柱穴等は確認できない。下半部は抉り込まれており、木材の沈下を防ぐなどの目的と思われる。

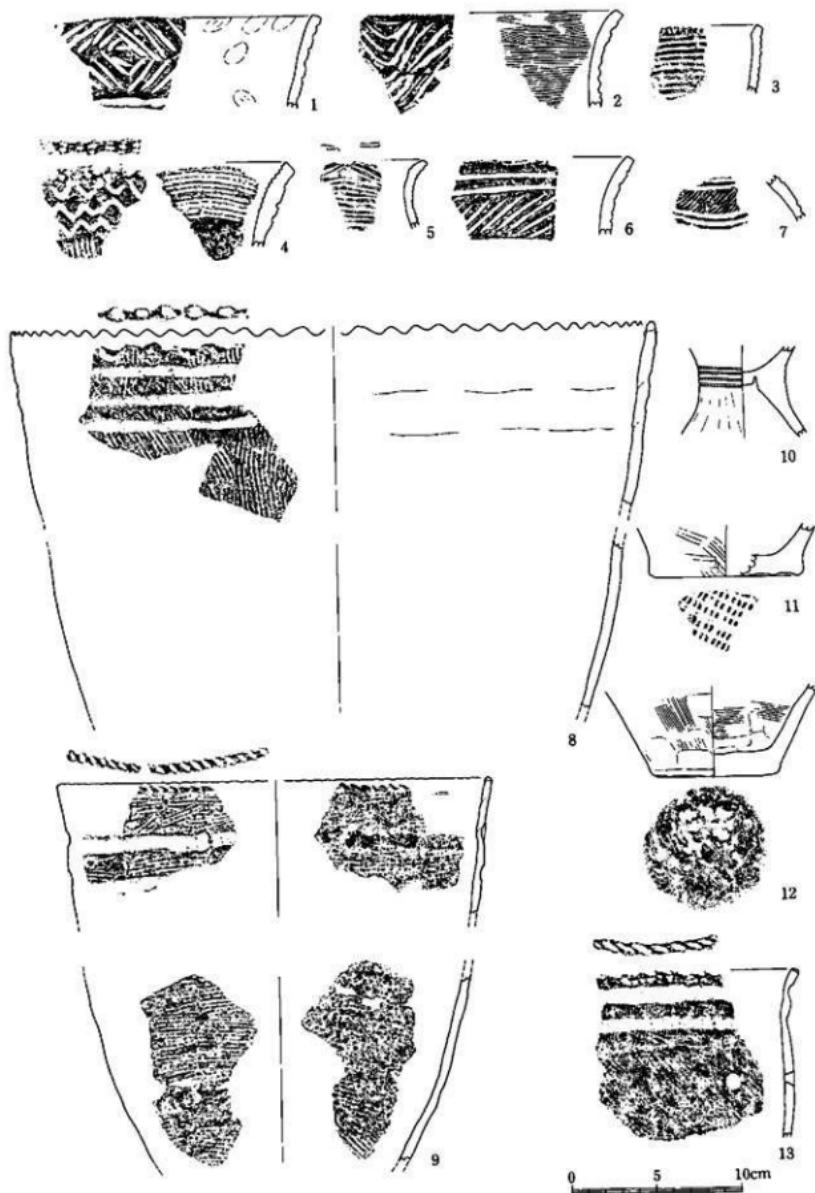
(第22図) 63はS E 201より出土した幅1.2cm・長さ15cm・厚さ0.2cmの木製品。同様のものが何点か出土しておりそのうちの最も残りのよいものを図示した。用途は不明であるが、複数個で使用したと考えられる。

(松浦)

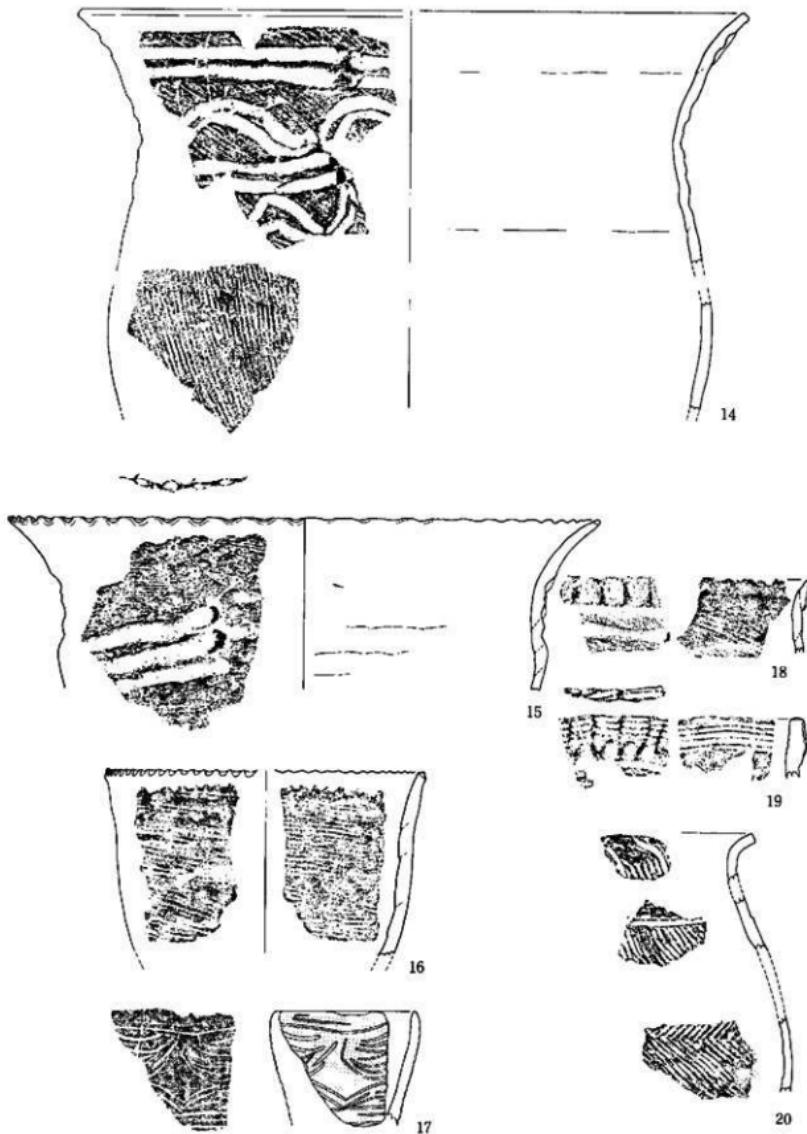
参考文献

小松市教育委員会「松梨遺跡」1994年

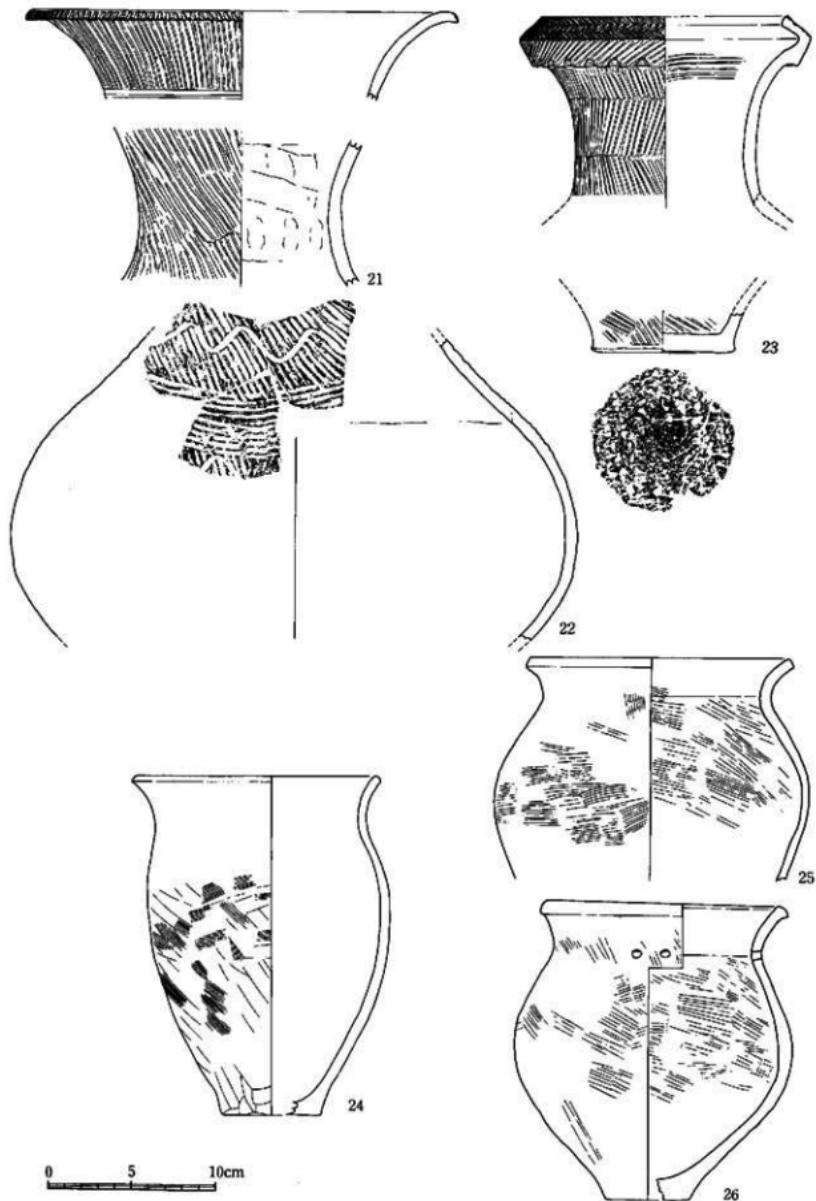
辻尾榮市「舟舟に関する形式形態の諸問題」『郵政考古紀要』 XIV 大阪・郵政考古学会 1989年



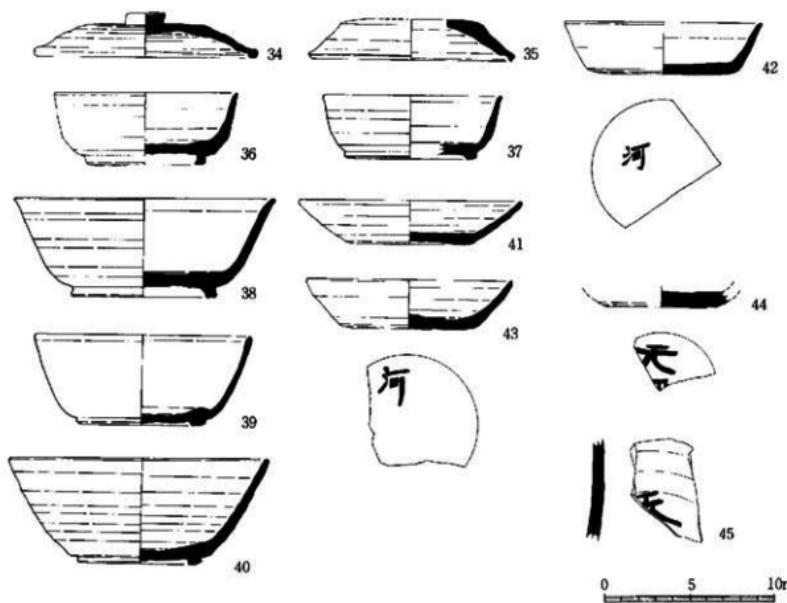
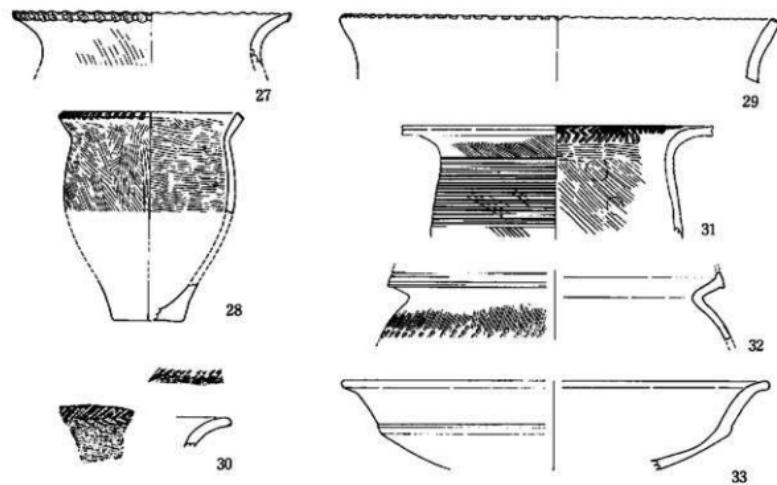
第17図 出土遺物実測図(1)



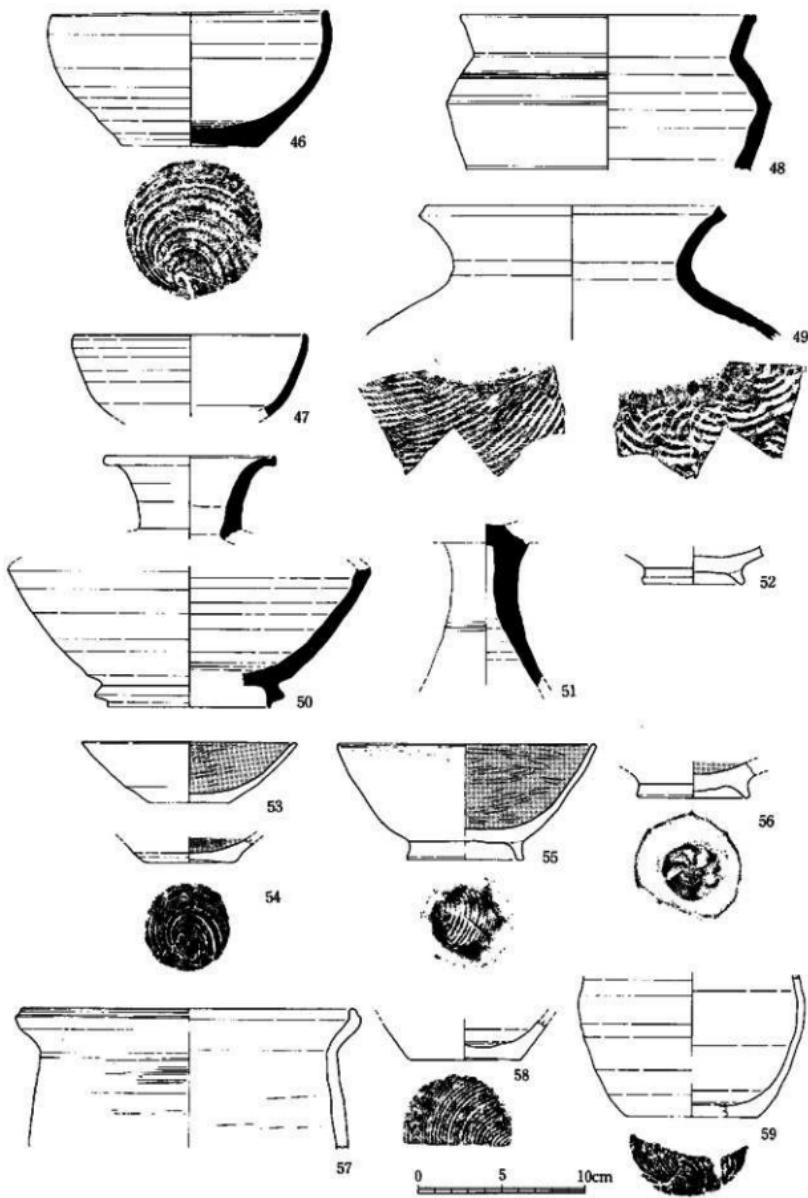
第18図 出土遺物実測図(2)



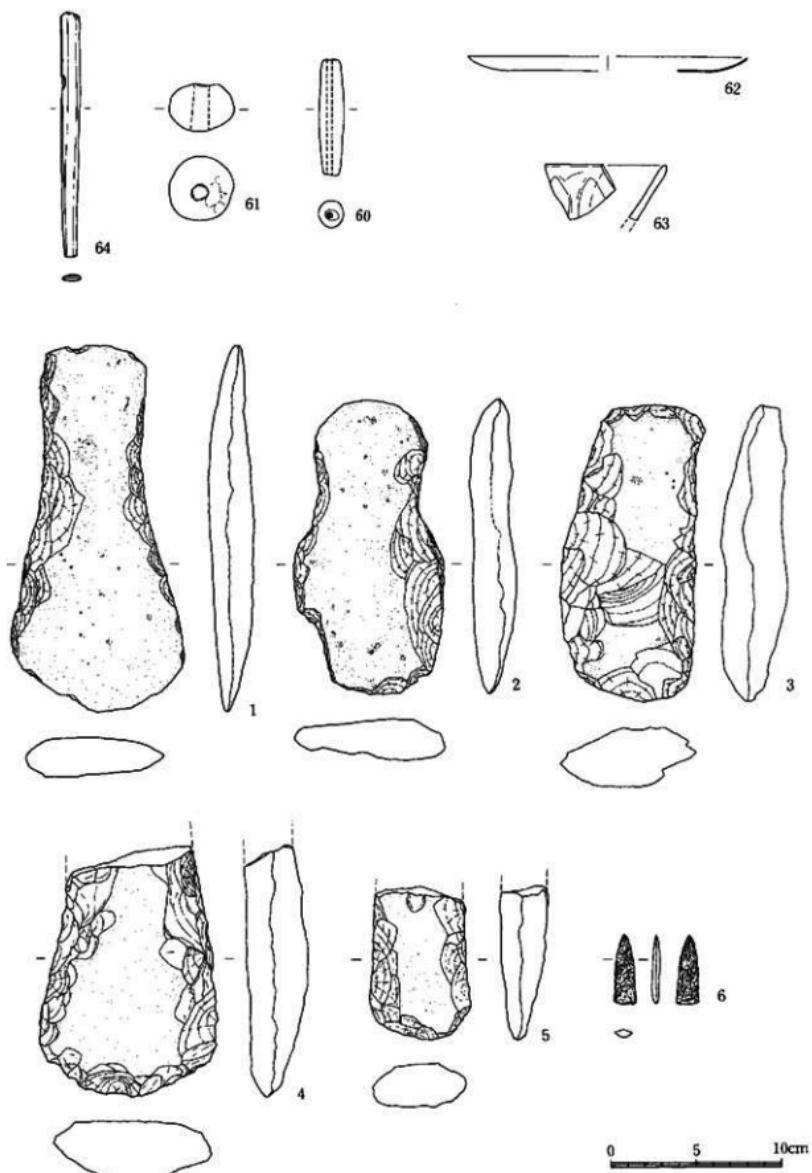
第19図 出土遺物実測図(3)



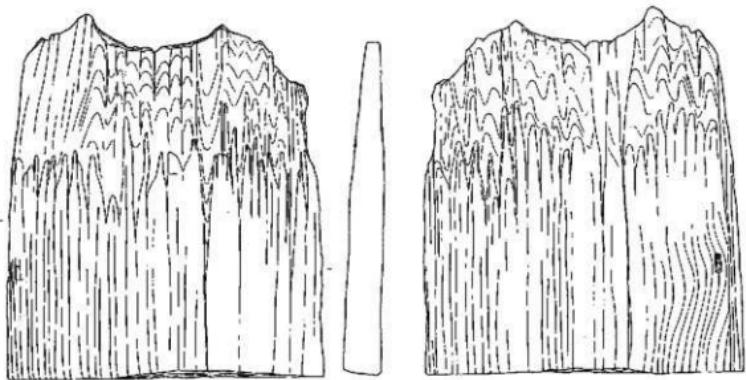
第20図 出土遺物実測図(4)



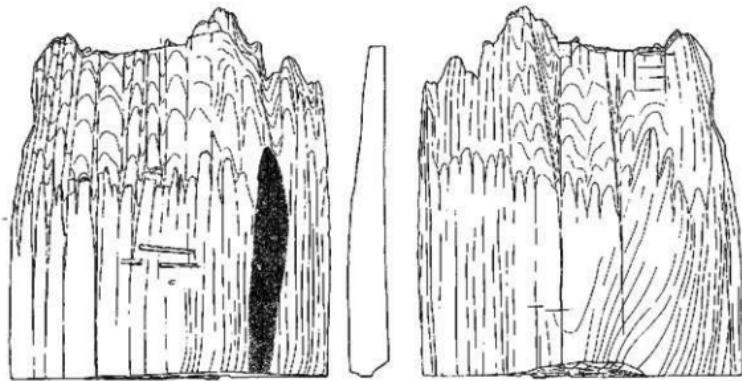
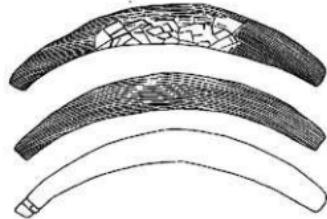
第21図 出土遺物実測図(5)



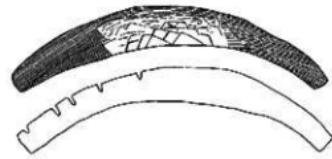
第22图 出土遗物实测图(6)



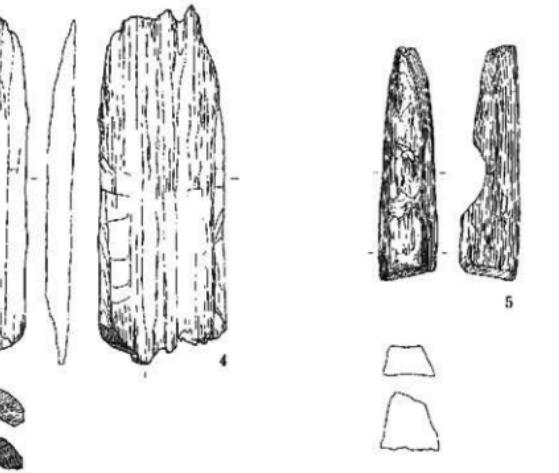
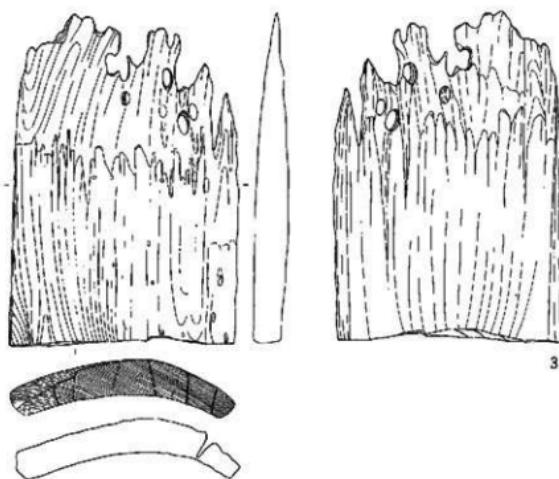
1



2



第23図 出土遺物実測図(7) ($S = 1/10$)



第24図 出土遺物実測図(8) (S=1/10)

	出 土 地	器種	法 量	調	色 調	胎 土	備 考
1	S D201 中段下層			外 沈縫 内 指彌压	茶褐 黄褐	砂礫S少	煤
2	S D201 最下層			外 沈縫 内 ハケ	灰黃褐 黃灰	砂礫S少	
3	S D201 上層			外 沈縫 口端キザミ 内 ナデ	黒褐 黑褐	砂礫M少	煤
4	S D201 下層			外 沈縫 口端キザミ 内 沈縫	浅黃 浅黃	砂礫L多	
5	S D201 下層			外 沈縫 内 沈縫	灰黃 灰黃褐	砂礫S	
6	S D201 最下層			外 沈縫 内 沈縫	黃褐 黃褐	砂礫M少	煤
7	S D201 最下層			外 沈縫 極文光澤	茶灰	砂礫L少	外煤 内炭化物厚
8	S D201 最下層	甕	口38.2	外 条痕 指沈縫 口端キザミ 内 ナデ	灰黃 灰黃	砂礫L少 海緑	煤
9	S D201 最下層	甕	口25.6	外 条痕 指沈縫 口端キザミ 内 条痕	黃灰 浅黃	砂礫L多 海緑	煤
10	S D201 上層	高环脚		沈縫	黃褐	砂礫M少	
11	S D201 底部	底 9.0		外 内	浅黃 浅黃	砂礫M多 海緑	スダレ状斑痕
12	S D201 級下層	底部	底 7.2	外 ハケ 内 ハケ ナデ	黃褐 暗灰黃	砂礫LM多	斑痕
13	S D201 下層	甕		外 条痕 指沈縫 口端キザミ 内 ナデ	浅黃褐 浅黃褐	砂礫M多 海緑	穿孔
14	S D201 下層	甕		外 条痕 指沈縫 内 ナデ	黃褐 黃褐	砂礫L多 海緑	煤
15	S D201 下層	甕	口33.4	外 条痕 指沈縫 口端キザミ 内 ナデ	淡黃 淡黃	砂礫L少 焼土	煤
16	S D201 最下層	甕		外 条痕 口端キザミ 内 条痕	黃灰	砂礫L少	炭化物厚く付着
17	S D201 最下層		口 8.5	外 沈縫 内 ナデ	黃褐 黃褐	砂礫S少 海緑	煤 赤彩 赤彩
18	S D201 下層	甕		外 指沈縫 内 条痕	淡黃 淡黃	砂礫S少 海緑	
19	S X303 上層	甕		外 刺突 口端キザミ 内 尖縫	淡黃 淡黃	砂礫S多	
20	S D201 最下層	甕		外 条痕 沈縫 内 ナデ	灰黃 灰黃	砂礫L少	煤
21	S D201 下層	甕	口25.2	外 条痕 内 内	淡黃褐	砂礫L多	
22	S D201 最下層	甕	剥33.8	外 条痕 沈縫 内 内	灰黃 淡黃	砂礫LM少	
23	S D201 下層	甕	口14.5	外 内 沈縫	灰白 灰白	砂礫L多 焼土	
24	S D201	甕	口14.8 剥14.5 底 6 器20.3	外 ハケ	褐灰	砂礫L多	外煤
25	S D201	甕	口14.1 剥18.6 内	外 ハケ 内 ハケ	茶灰	砂礫M少	外煤
26	S D201 下層	甕	口13.5 剥16.5 底 5 器17.8 内	外 ハケ 内 ハケ	褐灰	砂礫M少	外煤 2個1対穿孔
27	S D201 最下層	甕	口16.3	外 ハケ 口端キザミ 内 内	黃褐 黃褐	砂礫L少	炭化物 煤
28	S D201 下層	甕	口10.3 剥10.2 底 4.0	外 ハケ 口端キザミ 内 内	淡黃 淡黃		
29	S D201 下層	甕	口25.4	外 口端キザミ 内 内	黃褐 黃褐	砂礫M少	煤
30	S D201 下層	甕		外 条痕 ハケ 口端キザミ 内 ハケ 線形文	灰黃 灰白	砂礫L少	
31	S D201 下層	甕	口18.4	外 ハケ 線形文 ハケ	黃褐	砂礫S少 焼土	
32	S D201 下層	甕		外 刺突ハケ 口端凹縫 内 内	淡黃 淡黃		
33	G区 S D304	高环	LJ25.4	外 沈縫	淡黃 淡黃	砂礫M少 焼土	
	北側	底部			暗赤褐	砂礫S少 海緑 焼土	

No.	区	出土地	器種	法量	調整	色調	胎土	焼成	備考
34	C	P243	須恵器 蓋	口13.4 高 2.4 高 2.7	天面部へラ切り 後ナデ	灰白色	やや密。砂粒少、 2~4mm離多。	良	
35	A	S D201(河)	須恵器 蓋	口11.9	天面部へラ切り 後ナデ	灰黃色	やや密。砂粒少、 小離少。	やや不良	
36	南調		須恵器 有台杯	口10.8 台 5.7 高 4.4	底部へラ切り後 ナデ	灰色	やや粗。砂粒多、 小離少。	良	
37	C	P234	須恵器 有台杯	口10.6 台 8.0 高 3.8	底部へラ切り	灰色	密。砂粒極少。	良	
38	C	S K208	須恵器 有台杯	口15.4 台 9.5 高 5.9	底部へラ切り	灰色	やや粗。砂少、1 mm離少。	良	鉛物溶着。 (1~5mm)
39	北調	黒色土溝 ほか(河)	須恵器 有台杯	口12.8 台 7.6 高 5.4	底部へラ切り	褐灰色	やや密。砂極少、 1mm離少。	良	
40	A	S K211 上面	須恵器 有台杯	口15.2 台 7.0 高 6.7	底部へラ切り	灰白色	やや密。砂粒少、 1~2mm離少。	良	
41	南調	S D105(河)	須恵器 無台杯	口13.4 底 6.6 高 2.6	底部へラ切り	灰色	密。砂粒少。	良	
42	A	S D201 6区(河)	須恵器 無台杯	口12.4 底 8.4 高 2.9	底部へラ切り後 工具による粗い ナデ	灰白色	やや密。砂粒少、 2~3mm離少。	良	「河」墨書
43	北調		須恵器 無台杯	口12.3 底 7.6 高 3.1	底部へラ切り後 粗い横ナデ	灰白色	密。砂粒少。	やや 良	「河」墨書
44	F		須恵器 無台杯	底 6.6	底部へラ切り後 ナデ	灰白色	やや密。砂粒極 少。	良	「天?」墨書 底部破片
45	A	S D201(南 上面)(河)	須恵器 無台杯?		底部へラ切り	灰白色	密。砂粒少。	良	「天?」墨書 底部破片
46	G	S D301 上面(河)	須恵器 鉢	口16.4 底 8.1 高 8.1	底部糸切	灰色	やや粗。砂粒多、 1~5mm離多。	良	
47	D	S D301(河)	須恵器 鉢?	口13.6		灰色	密。砂粒少。	良	
48	A	S D201 5区上附(河)	須恵器 短縫蓋	口17.4 刷19.2		灰色	やや密。砂粒多。	良	
49	A	S D201 6区上面(河)	須恵器 壺	口17.4		灰色	粗。砂粒極多、 1~4mm離多。	良	
50	北調	S D101(河)	須恵器 台付瓶	口10.0 台 9.4 刷21.6		にぶい黄褐色	やや密。砂粒少、 1~5mm離多。	良	肩部欠損
51	南調		須恵器 高杯	(残高 9.7)		灰色	密。砂粒少。	良	脚部のみ残存
52	E	S D301 上面(河)	土師器 有台碗	台 6.0	貼付高台	にぶい橙色	やや密。微細蓋母 片施少、微細骨針 極少。	良	底部のみ残存
53	E	S D301 上附(河)	土師器 無台碗	口12.5 底 4.8 高 3.6	内黒。底刷、下 外側面1/3~2/3 削り	外: 淡黄色 内: 黒色	密。微砂粒少、微 細蓋母片少、微細 骨針少。	良	
54	A	S D201 1区(河)	土師器 無台碗	底 5.4	内黒。底部糸切、 内面ミガキ	外: 浅黄色 内: 黑色	やや粗。砂粒極 少、微細蓋母片 少。	やや不良	底部のみ残存
55	南調	S D101(河)	土師器 有台碗	口15.3 底 7.0 高 6.9	内黒。内面全、 外面上1/4~1/2 半。底部糸切、 貼付高台	外: にぶい椎色 内: 黑色	密。砂粒極少、微 細蓋母片多。	良	
56	E		土師器 有台碗	台 6.4	内黒。花形枕か き出し高台	外: 淡黄色 内: 黑色	粗。砂粒極多、微 細蓋母片多、2mm 離極少。	やや不良	
57	南調	S D101(河)	土師器 壺	口 9.6		淡黃褐色	やや粗。砂粒少、 骨針極少。	やや不良	
58	南調		土師器 壺	底 6.6	底部糸切	淡椎色	やや粗。砂粒極 少、骨針極少。	やや不良	底部のみ残存
59	南調	S D101(河)	土師器 壺	刷13.4 底 7.8	底部糸切	にぶい黄褐色	密。砂粒少、骨針 少、蓋母片極少。	やや 良	底部、底部のみ残 存
60	G	S D301(河)	土罐 (輪形)	高3.87 厚 2.8 孔径 1.1 重58.0		灰黃褐色	密。骨針極少。	良	
61	F		土罐 (蝶形)	長6.96 厚 3.2 孔径 0.95 重14.8		黑色	密。砂粒極少、骨 針極少。	良	
62	E	S D301(河)	漆器 皿			黑色			
63	G	S D301 上面(河)	青銅 鏡			裏地: 灰白色 輪: 透明な明オ リーブ灰色	密。	良	外面邊井浮形

No	名 称	出 土 地	長さ	幅	厚み	重 量	石 材	備 考
1	打製石斧	S D201-1	21.9	10.9	2.4	556.2	ヒン岩	
2	打製石斧	F区 S D310	17.7	9	2.6	469.5	火山凝灰岩	
3	打製石斧	S D201-6 上層	17.8	8	3.5	630	安山岩	
4	打製石斧	E区 S D310 上層	15.1	10.6	3.7	735	火山凝灰岩	
5	打製石斧	S D201 最下層	9.2	6.1	2.5	209.4	火山凝灰岩	
6	石鎌	S D201 最下層	4.2	1.4	0.4	2.4	輝石安山岩	

No	名 称	出 土 地	長さ	幅	厚み	備 考
1	井戸枠	S E01	73.2	63.1	7.8	2と接合
2	井戸枠	S E01	74.5	63.7	7.2	1と接合
3	井戸枠	S E01	66	45.2	6.8	
4	井戸枠	S E01	71.9	25.6	5	
5	柱根	P205				

追　補

本遺跡の第1次調査で1号溝とつけられた遺構から遠賀川式の可能性のある土器の底部が検出された。本報告書作成終了直前にこの事の報告漏れに気付いた。ここで追加して遺構と遺物について報告したい。

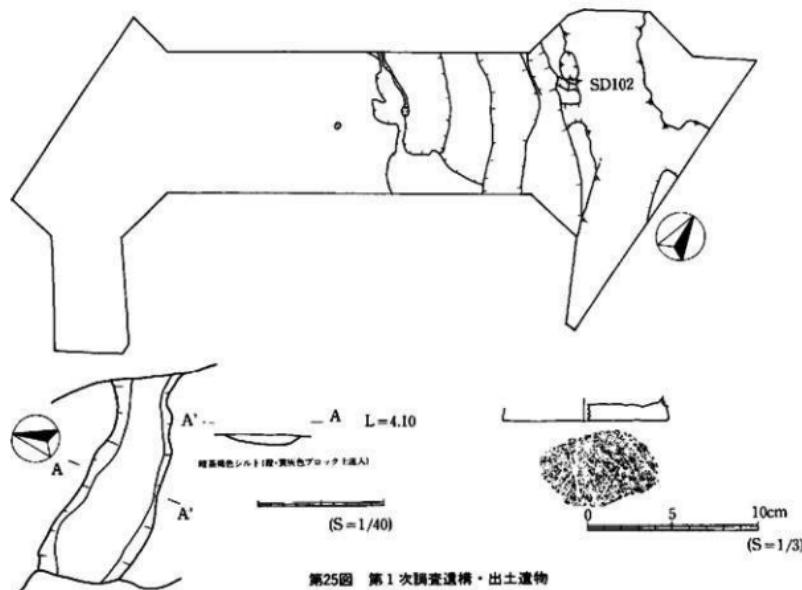
遺構

S D102

第1次調査区は北調査区と南調査区に分かれており、当遺構は北調査区の自然河道に直行するよう方位をとる。東西方向に流路をとるが検出されたのはごく一部で東西両方向とも河道により切られる。深さはわずか10cmで、暗茶褐色のシルト単層の埋土である。元々の上層部分はかなり削平を受けていると思われる。

遺物

S D102からはわずか2点の土器片が出たにすぎない。図示したものは壺の底部である。同時に出土した土器片は図示に耐えなかつたが胎土から在地の柴山出村式土器と見られ、図示したものは在地のものとは違う胎土である。時期的にも遠賀川の可能性が考えられる。色調は暗赤褐色、胎土は細かい砂粒と焼土粒を含む。海綿は含まない。体部への立ち上がり部分が若干残る。底部は葉脈の圧痕が幾重にも見られる。



第25図 第1次調査遺構・出土遺物

ま と め

今回の調査において遺構として明確に把握できたのは、古代のみである。調査区ではちょうど河道跡が中央に位置し、その両岸の遺構を検出したことになる。遺物量は少なく、河道跡（上層、上面）以外のものはごく少量である。

遺物からみた年代では、8世紀後半に属すると思われる須恵器から、11世紀の内面黒色土師器碗、14～15世紀に属する青磁片まで存在するが、ほぼ大半は8世紀末～9世紀前半の須恵器と内面黒色土師器碗である。

景観の復元を試みてみると、河川をはさんで西岸は梁行2間・桁行5間の大型掘立柱建物（F区・S B301）と少し離れて転用材の枠を持つ井戸（A区・S E201）が存在する。そのほかの遺構の存在は全くみられず、また建物の建て替えが行われていないことから、平安時代の8世紀末から9世紀前半の一時期のみに存在したものと判断される。また建物廃絶の際、柱材は抜いて持ち去っている。それに対し、東岸は梁行2間・桁行3間などの小規模の掘立柱建物が2、3度立て替えられていたり、数棟が同時に建っていた可能性もあり、様相が異なっている。両岸の地域が同時期に併存していたことは、出土遺物などからほぼ間違いないものと思われる。河川が土地利用の区画となっていた可能性が強い。

「河」や「天」の墨書き器が出土すること、集落が河岸のすぐそばに営まれていること、約800mと非常に近い距離に立地することなどから西念・南新保遺跡との関係が注目される。集落規模としては、数倍の違いがみられる。

出土遺物や堆積状況から見て、河道跡が主に利用されていたのは古代であろう。

井戸S E201の井戸枠が、準構造船の材を使用したものとすれば、検出された河道跡のような小河川を利用した水運で使用されていたものの転用とも考えられる。低湿地帯のため、周辺遺跡の調査では、必ずと言っていいほど河道跡が検出されている。これらが古代において有益な交通手段として利用されたものと思われるであったことは疑うべくもない。中世には自然堆積により、淀みの状態になっていたものと思われる。調査区内で集落を検出できなかったが、近辺に生活の場があった可能性が考えられる。

（熊谷）

報告書抄録

ふりがな	かなざわしふたつやまちいせき							
書名	金沢市二ツ屋町遺跡							
副書名	金沢西部地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書4							
編著者名	松浦郁乃、熊谷葉月							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921-8044 石川県金沢市米泉町4丁目133番地 Tel076-243-7692							
発行年月日	1998年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード(県番号) 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
二ツ屋町遺跡	石川県金沢市 二ツ屋町地内	17201	01291	36° 35' 19"	136° 37' 52"	第1次 1989. 6. 26 ~1989. 7. 28 第2次 1995. 11. 8 ~1995. 12. 26 第3次 1996. 4. 9 ~1996. 6. 13	第1次 約1.300m ² 第2次 約2.500m ² 第3次 約2.300m ²	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二ツ屋町遺跡	集落	弥生 奈良 平安 中世	河道跡 掘立柱建物跡 溝 土坑 井戸	弥生土器 石器 須恵器 土師器 木製品				



道路遠景（南東から）



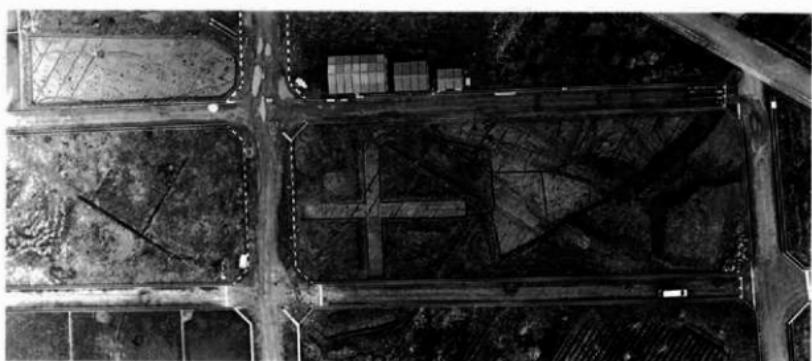
作業風景（第1次調査）



北調查区全景



南調查区全景



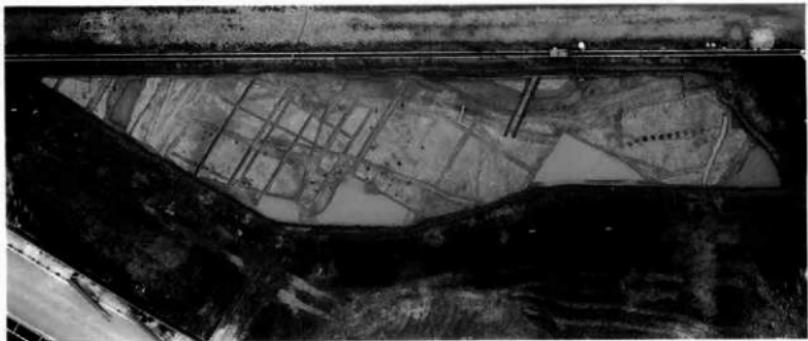
調査区全景（第2次調査）



A区全景



C区全景



E区全景



F区全景



G区全景



南調査区 SD101



A区 SD201



E区 SD301



北調査区 SD101



G区 SD301



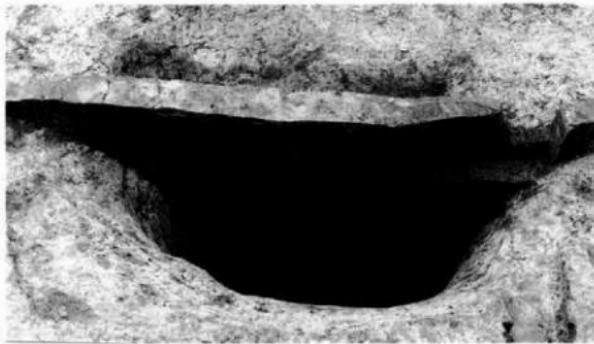
E区 SD301
土層断面



AIX
SK210～SK214



CIX
SK208 完撮



CIX
SK208 断面



CIE SB201 (南より)



CIE SB202



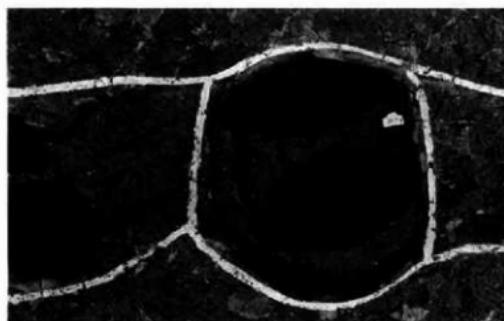
CIE SB203



E区 全景（北から）



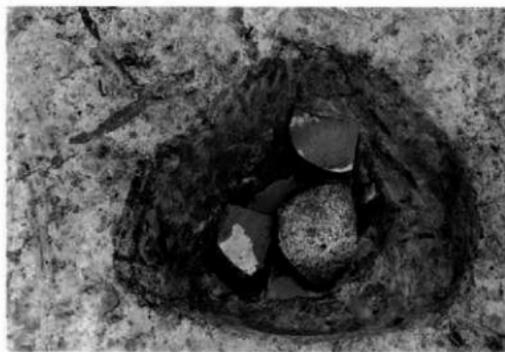
E区 SX301 (南から)



E区 P.319 (西から)



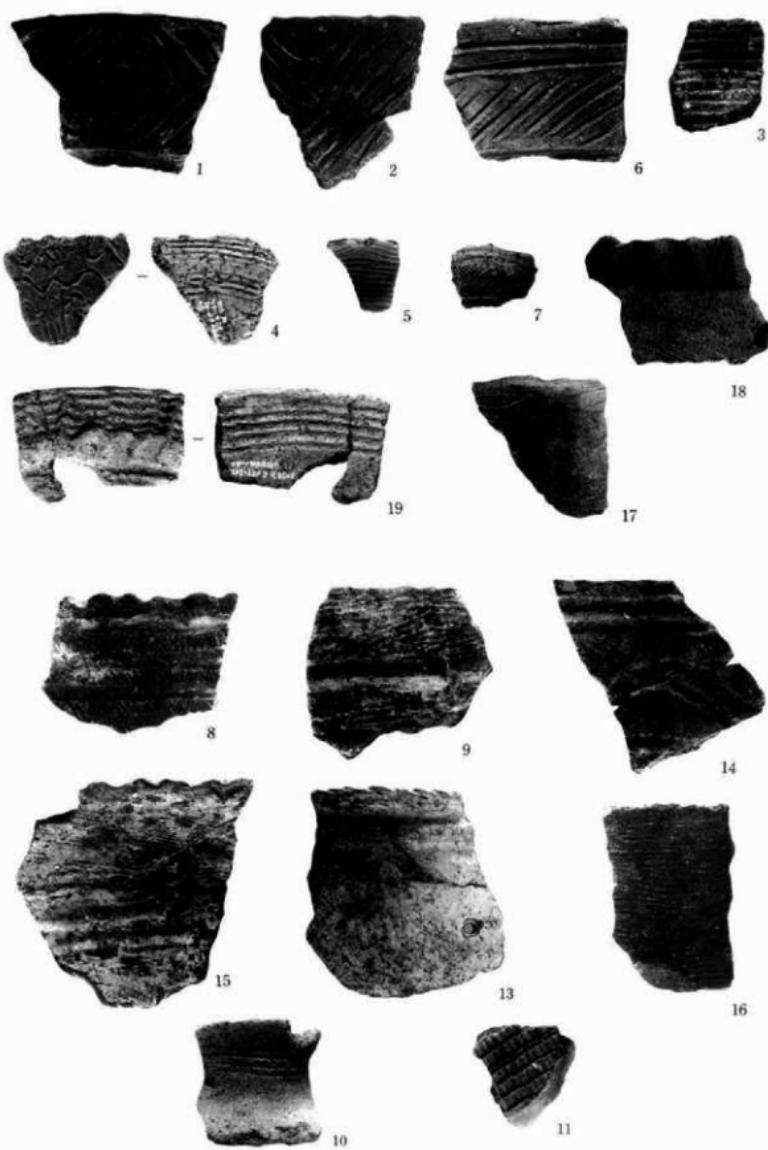
F区 SB301(北から)

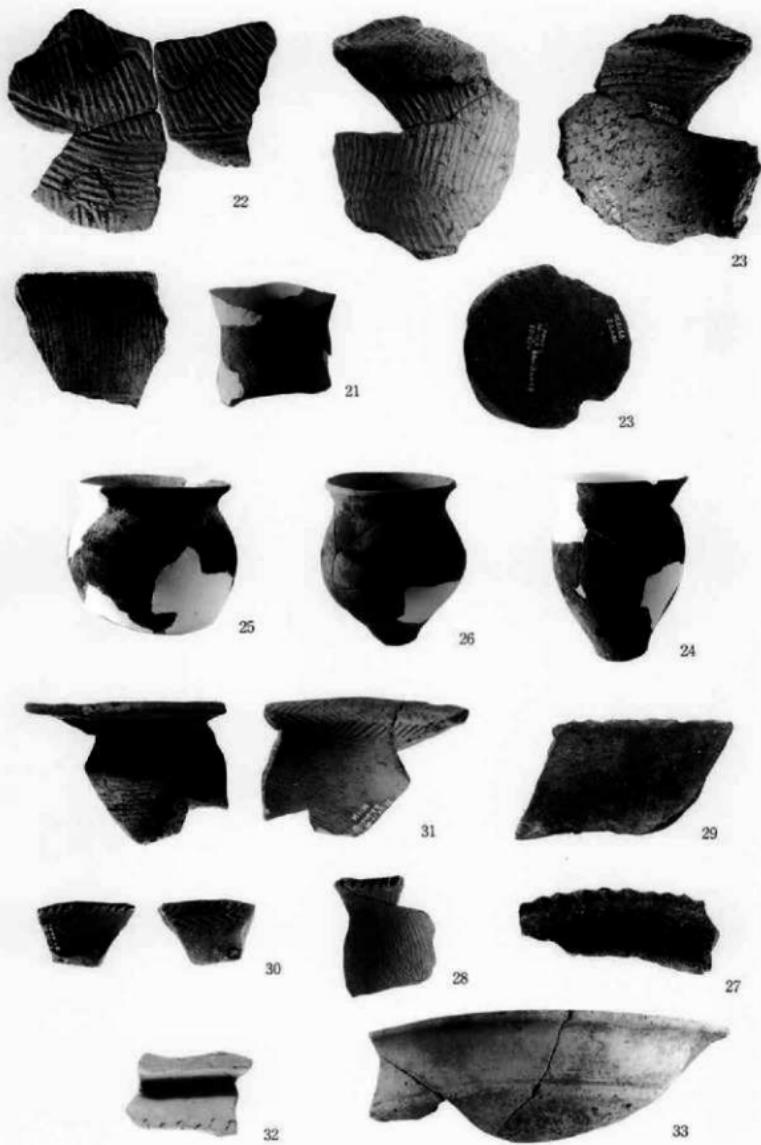


F区 P.314



A区 SX202







34



35



36



37



38



39



41



46



40



47



42



43



44



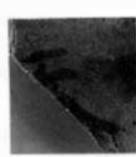
45



42



43

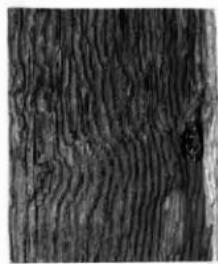


45



48





1

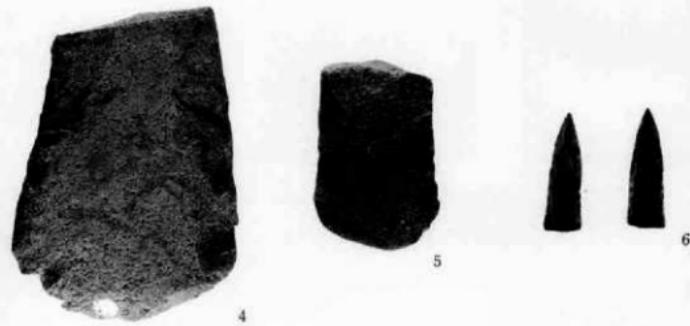
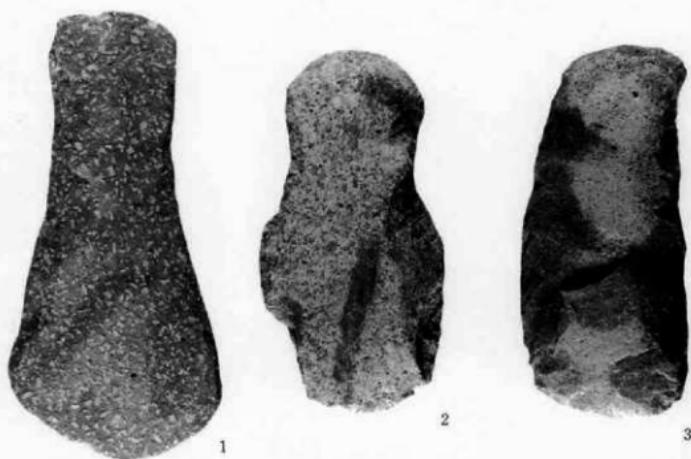
2

3

4

5





二ッ屋町遺跡

金沢西部地区上地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書4

発行日 1998(平成10)年3月27日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
〒921-8044 石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話(076)243-7692(代)
FAX(076)243-8988

印 刷 ヨシダ印刷株式会社
〒921-8546 石川県金沢市御影町19番1号
